

The Eastern Buddhist Society 百年の計	1
2020(令和2)年度「指定研究」等研究経過報告	2
2021(令和3)年度「指定・一般研究」研究組織一覧(追加)	6
2021(令和3)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介	7
2020(令和2)年度「一般研究」研究成果概要	8
2020(令和2)年度 東京分室PD研究員個人研究成果報告	30
公開シンポジウム報告(2021.4.1~2021.9.30)	32
公開研究会・講演会報告(2021.4.1~2021.9.30)	33
彙報(2021.4.1~2021.9.30)	34

大谷大学真宗総合研究所

# 研究所報

No.79

2022. 3. 1.

## The Eastern Buddhist Society 百年の計

東方仏教徒協会事務局長 井上 尚実

The Eastern Buddhist Society (EBS, 東方仏教徒協会) は、本年設立 100 周年の節目を迎えた。これを機に英文学術誌 *The Eastern Buddhist* は新たに第 3 シリーズ (Third Series) をスタートさせ、インターネットのウェブサイト (<https://ebs.otani.ac.jp>) も更新して使いやすくなった。この新しいホームページでは 1921 年の創刊号以来 *The Eastern Buddhist* に掲載されたすべての記事と論文が Open Access で世界中のどこからでも無料閲覧できるようになっている。“Back Issues” のボタンを押して Original Series (1921-1958) と New Series (1965-2018)、最新の Third Series (2021-) の索引に目を通すと、この 100 年の間に EBS から世界に向けて発信された仏教に関する情報と仏教的知見の膨大な量と質の高さには目を見張るものがある。これまでは、仏教に関心をもつ英語圏の購読者と大学や研究機関の書庫に収蔵されていた「目覚めの智慧」が、インターネットを通して広く一般に公開された意義は大きい。

1921 年の設立時、EBS のオフィスは大谷大学の図書館内に置かれ、*The Eastern Buddhist* は大谷大学の仏教研究の成果を世界に発信し、当時欧米ではまだ正に認識されていなかった大乘仏教・親鸞思想の重要性を伝えていく役割を担った。EBS の中心メンバーは国際的な視野をもった大谷大学の佐々木月樵 (1875-1926)、山辺習学 (1882-1944)、赤沼智善 (1884-1937) の 3 人の仏教学者と、学習院から大谷に移って英文編集を任された鈴木大拙 (1870-1966) とその妻ビアトリス・レイン・スズキ (1878-1939) の 5 名であった。100 年前の英語圏では、パーリ語で伝えられたテーラヴァーダ (Theravāda, 上座部) の教えが正統な仏教であり、サンスクリット語から漢訳されて東方に広まったマハーヤーナ (Mahāyāna, 大乘) は、釈迦の教えを正しく伝えていないという偏見が、仏教に関心をもつ学者たちの間にも根強かった。創刊号の論説 (Editorial) をみると「大乘仏教の真の精神」(the true spirit of Mahāyāna Buddhism) を英語で世界に広めることがこの雑誌の目標であった。

この第一の目標に関しては、過去 100 年間で十分に達成されたといえる。20 世紀の後半には欧米の主要な大学に仏教学 (Buddhist Studies) の講座が開かれ、大乘仏教は仏教の主要な伝統として研究されるようになってきている。『般若経』の「空の思想」や中観や唯識といった大乘の哲学思想について、英語圏の優れた学者たちが議論を深めているし、1990 年代以来アフガニスタンやパキスタンから新たに出土したガンダーラ語初期大乘経典の写本研究は、欧米とアジアの研究者が協力して国際的に進んでいる。このような大乘仏教研究の世界的潮流を生み出した源には、*The Eastern Buddhist* の Original Series と New Series を通じた貢献があったのである。

EBS のこれから「百年の計」について考えるとき、必ずや実現したい課題の筆頭に挙げられるのは、親鸞思想についての国際的な理解を広めることであろう。これは EBS 設立当初に佐々木月樵、山辺習学、赤沼智善の 3 人を中心に強く願われたことであり、鈴木大拙の英訳『教行信証』(1973 年) などを通して努力が継続されてきた。まだ道半ばで達成は難しい目標かもしれないが、一歩ずつ歩み続けることに意義がある。

2021 年 9 月に大谷大学を会場にオンライン開催された日本印度学仏教学会第 72 回学術大会では、「浄土教は現代思想の諸課題にいかに応えるか」というテーマで EBS 設立 100 周年記念パネルを設け、平岡聡 (京都文教大学学長)、守中高明 (早稲田大学教授)、藤元雅文 (大谷大学准教授)、氣多雅子 (京都大学名誉教授) の 4 氏をパネリストに迎え、仏教学・哲学・真宗学・宗教学の幅広い角度から浄土思想の可能性について議論を深めた。また最新号の Third Series, Volume 1 Number 2 では、真宗の近代化をテーマにした小特集が組まれている。編集長 Robert F. Rhodes (大谷大学名誉教授)、専任編集者 John LoBreglio を中心に、*The Eastern Buddhist* の地道な歩みが継続している。100 年後の成果に期待したい。

# 2020（令和2）年度「指定研究」等研究経過報告

## 特定研究

### eラーニングなど、インターネット環境を活用した新しい教育システムの開発・導入

研究代表者・学長 木越 康  
(真宗学)

大谷大学は近年、仏教および真宗の学びを一般社会へと広く公開することを主要な活動のひとつとして位置付けてきた。この活動はこれまで本学を会場とした公開講座や紙媒体での出版物などを通して行われてきたが、本研究班では、仏教公開の理念をさらに積極的に展開するため、「Eラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動」に関する研究を進めてきた。

2019年度から始まった本研究は、2018年度、つまりCOVID-19の蔓延以前からすでに計画されたものであった。しかし2020年から2021年にかけて、ウイルスによる世界の混乱は、期せずして多くの人々の間でインターネットを介した情報交換や教育活動を推進させてきた。本研究班もその影響を受けつつ、また特にその反省から、より有効なEラーニングコンテンツの開発を目指して研究を進めてきた。

目的達成のための第一段として、現在は「仏教入門」に関するコンテンツ開発に着手している。全9回の構想のもとで、原稿作成と資料映像収集の作業をすすめている。9回中3つのコンテンツについてはテスト収録を繰り返しているが、想定通りの仕上げに至らずに、苦労を重ねている。当初計画によれば、2021年度後期には半数分についてテスト配信を行い、2022年度からの実運用開始に向けた態勢を整えるはずであったが、2021年10月現在で、第1回目「はじめに—仏教遺跡と仏教典籍—」の試作版を完成させたのにとどまっている。

今後は、テスト収録を終えている他2本についての試作版収録を12月末に終え、年度内にテスト配信を行いたい。これまでの失敗の積み重ねによって収録経験も重ねてきたので、以降は比較的速やかに作業を進めることが出来るものと期待している。

## 国際仏教研究

### 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授 井上 尚実  
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。近年、仏教学・宗教学の分野における国際化は以前にも増して急速に進んでおり、真宗についても外国語による研究を視野に入れなければならない状況にある。そうした動きに対応すべく、欧米とアジアの言語文化圏を担当する二つの班を置いて研究活動を進めてきた。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、2020年度の研究計画を大幅に変更する必要があったが、各班の研究成果の概要は以下の通りである。

#### 〈欧米班〉

##### ①翻訳研究活動

2020年度には、第8回と第9回の『歎異抄』翻訳研究ワークショップを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、ワークショップの性質に鑑みて、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターとの協議の上、対面開催が可能となるまで延期することにした。

##### ②国際学会参加

COVID19のために以下のような変更があった。

- 1) 国際仏教学会 (IABS) 第19回学術大会にてマイケル・コンウェイ研究員が個人発表をする予定であったが、大会は2022年に延期された。
- 2) 国際宗教学宗教学会 (IAHR) 第22回世界大会において井上尚実研究員、ショバ・ラニ・ダシュ囑託研究員、木越康教授によるパネル発表を行う予定であったが、大会が中止された。
- 3) 国際真宗学会第20回ヨーロッパ大会で加来雄之研究員が個人発表の予定であったが大会は中止された。
- 4) アメリカ宗教学会 (AAR) 年次大会に、アメリカの宗教研究の動向を把握し、東方仏教徒協会 (EBS) の運営のために論文発掘および人脈の充実を図る目的でマイケル・コンウェイ研究員が参加する予定であったが、大会は2020年11月29日から12月11日

までオンライン形式で開催されるように変更となったので、時差が許す限り、Zoom上で参加した。

### ③シンポジウム成果の出版準備

1) *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology* 出版記念シンポジウム成果出版に向けて、マーク・L・ブラム教授(嘱託研究員)とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集により欧米の大学出版から出版する予定で編集作業を進め、2020年10月31日にハワイ大学出版に原稿を入稿した。2022年4月に発行される予定である。

2) 国際仏教シンポジウム「仏陀の言葉とその解釈」(ELTE 東アジア研究所と共催) 成果出版物として *The Buddha's Words and Their Interpretations*(The Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Otani University, Kyoto) を ELTE のハマル・イムレ教授と井上尚実研究員の共編で2021年2月に発行した。

### ④公開講演会の開催

今年度は3回の公開講演会を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、開催できなかった。

### ⑤ The Eastern Buddhist Society 事業

1) *The Eastern Buddhist* 第49巻第1/2号(合併号)を2月に刊行した。

2) 第三シリーズに向けて、装丁・レイアウト等についての具体的な検討を進め、装丁等を決定した。

3) 2021年に控えている協会設立100周年記念事業について検討し、9月の日本印度学仏教学会の第72回学術大会において開催校特別パネルの枠で100周年記念パネルを設けることとし、その企画をした。また11月のアメリカ宗教学会年次大会におけるパネル発表の準備をした。

#### 〈アジア班〉

### ①中国社会科学院古代史研究所との学術交流協定に基づく研究活動

例年、相互に訪問し、研究会を開催してきたが、本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、開催することができなかった。なお、2015年12月に開催した「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果として論文集については、来年度の出版を目標に準備を進めている。

### ②ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

『日本仏教概説』出版に向けた作業を行った。Pham Thi Thu Giang 嘱託研究員が日本語原稿の翻訳作業を行い、なお継続作業中である。新型コロナウイルス感染症の影響により、相互訪問による詰め作業を行うことはできなかった。

## 西藏文献研究

### チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授 三宅 伸一郎  
(チベット学)

本研究は、大谷大学所蔵チベット語文献のうち重要・貴重なものを整理し、データベース化するとともに、電子テキスト化・デジタル画像化して公開することを目的としている。この目的を達成するために、2020年度は、以下の研究をおこなった。

#### (1) チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

今年度は(A)『極楽に生まれるボワ(遷移)と犯戒還浄など』(蔵外 no. 13940)と(B)プトン・リンチェンドゥブ(1290-1364)『仏教史善説宝蔵(=プトン仏教史)』(蔵外 no. 11842)の研究をおこなった。(A)は、無量光仏の観想法や、極楽往生のための「ボワ(遷移)」の行法(ともにパンチェン・ラマ4世の著作)、戒律違反を懺悔し、その罪を浄める方法について説いた計4点のテキストによって構成された写本である。本写本の前半部に関しては、異読の多さからタシルンポ版パンチェン・ラマ4世所収本を筆写したものではないことが推測される。なお、本写本の表紙には「spyi」(「公」という意味)と陰刻された小型の朱印が押されている。大谷大学所蔵のチベット語文献に見られるこうした捺印に対する研究も、今後進める必要があろう。本写本の研究としては、校訂テキスト作成とともに、典拠となる資料の収集もおこなった。

(B)に対する研究としては、十分に研究が進展していない第1章仏教概説の部分について、研究発展のための基礎的資料を提供するために、本学所蔵のタシルンポ版(no.11841)をはじめとした各種版本・写本を用いた校訂テキストの作成をおこなうこととした。今年度は、タシルンポ版、シャル寺版、ラサ版、中国蔵学研究中心刊行活字本の異読箇所を確認をおこなった。

#### (2) モンゴル国立大学との共同研究

第1期(2013~2015年度)の研究成果報告書(松川節・P.デルゲルジャルガル編『モンゴルにおける仏教の後期発展期(13世紀~17世紀)の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学研究:第1期(2013~2015年)研究成果報告書』大谷大学真宗総合研究所)を完成させた。モンゴル語論文が4本、日本語論文が2本、英語論文が1本が収録されている。モンゴル語・日本語のものについてはそれぞれ日本語・モンゴル語による要旨を付した。

## 清沢満之研究

### 『清沢満之全集』別巻の編纂と思想研究

研究代表者・准教授 西本 祐攝  
(真宗学)

本研究は、清沢満之の生涯と思想の研究を進め、その成果を大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店、以下『全集』と略）の別巻として刊行することを目的としている。本年度は、2018年度より開始した研究計画の最終年度である。前年度の別巻Ⅰ刊行に続き、年度末までの別巻Ⅱの刊行をめざし活動を行った。また、『全集』のオンデマンド版の出版に向けた作業を並行して行った。本年度の主な活動は以下の通り。

#### 1、『清沢満之全集』別巻Ⅱ刊行

別巻Ⅱの刊行に向けた編集作業は、研究員（9名）研究補助員（2名）と研究補助者（5名）で進め、文字の確定、本文の確認、図版等の体裁、注項目の抽出等を中心とする読み合わせを8月中に終えた。体裁の調整や確認作業を経て9月に入稿した。「解説」については、西洋哲学・日本思想史の研究者である藤田正勝氏（京都大学名誉教授）に執筆いただき、ほぼ同時に入稿した。原稿の校正刷は、2020年11月から2021年3月にかけて研究班構成員の全員で確認を行い、当初の計画通り、年度内の2021年3月26日に刊行した。

#### 2、『全集』オンデマンド版の出版

岩波書店との交渉で『全集』のオンデマンド版を同社から刊行することとなった。これに向けて、『全集』刊行後に把握した修正箇所の確認や整理作業を行った。毎月1巻の刊行予定で、第1巻の刊行を2020年4月に開始した。コロナによる出版事情への影響もあり、第2巻以降の刊行には若干の遅れも生じたが、2021年3月までに第9巻までの配本を完了している。

#### 3、今後に向けて

当初の計画通り、別巻Ⅰ・Ⅱの刊行を果たすことができたわけであるが、それは本研究のメンバーのみではなく、関係寺院・施設、研究機関、研究者、大学の関係部署のご協力、個別の検討事案にご助言いただいた学内教員（歴史学科、文学科、仏教学科、真宗学科）の方々の力添えによって実現できたものであることをここに銘記しておきたい。

また、当初、収録予定であった文献で掲載を見送ったもの、編集集中に寄せられた清沢著述文献の情報等、編集作業と並行して確認した事柄がある。それらについては本研究所『研究紀要』等で経緯も含めて報告し、今後の清沢満之研究の課題として共有していく。

## 大学史資料室

### 大学史関係資料の収集・整理

室長・教授 DASH Shobha Rani  
(仏教学)

大谷大学の公文書及び、大学の歴史に関する様々な資料を収集、整理、管理、保存することが本資料室の主な目的である。それに加えて、資料や情報提供、保存資料の学内展示などを通して資料公開にも努めている。大学史資料の他に、パンフレットやノベルティなど大学発行物を大学史資料として保管していくことも目的としている。本資料室の2020年度の活動は以下の通りである。

#### 1、所蔵資料と寄贈資料の整理

学内所蔵資料と他大学からの寄贈図書やパンフレット等の整理が行われ、図書等の目録化や住所録作成・整理が行われた。

#### 2、所蔵資料・データ調査・貸出業務

学内及び学外から3件の大学史所蔵資料に関する確認の問い合わせがあり、それを対応させていただき、関係資料の照会などを行った。

#### 3、所蔵資料の学内展示

図書館エントランス展示スペースにて「大谷大学～in 東京～」と題したスポット展示を行った。本展示では、明治34（1901）年10月13日に東京巢鴨で開校した真宗大学の様子を写真や資料を用いて紹介した。（展示期間：2020年9月1日～2020年10月30日）

#### 4、学会参加

大学史に関する知識を深めるために全国大学史資料協議会とその西日本部会の研究会に参加予定であったが、COVID-19の影響により中止となった。

## デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の  
デジタル・アーカイブの構築室長・教授 DASH Shobha Rani  
(仏教学)

本資料室の主な目的は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資産をデジタル化し、それらを整理、保存すること、そしてそのデータを研究資料として公開、提供することである。2020年度の研究活動・成果は以下のとおりである。

①大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースの登録および公開に取り組んで、2020年度分の公開準備中の件数は現在のところ221件であり、これを合わせて公開準備中合計件数は1,264件になった。2020年度に348件の書籍が公開された。これによって2021年3月までの古典書籍の公開件数は14,851件になった。

②タイ王室より寄贈され、現在本学に所蔵されているパーリ語貝葉写本(以下「大谷貝葉」と略す)の詳細目録が『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』(大谷大学図書館編)という題名で1995年に出版されているが、これのデジタル・データがないことが確認された。パーリ語貝葉写本の今後の整理と研究のため、そのデジタル入力作業が2020年度から始まり、Excelでのデータ入力が概ね済んでおり、その校正作業が進行中である。

③2021年2月26日(金)にハイデルベルク大学(ドイツ)との共同シンポジウム「The Digital Preservation of Asian Manuscripts and Documents」(アジアにおける写本と資料のデジタル保存)を実施した。今回のシンポジウムでは、日本・タイ・ネパールにおける諸写本のデジタル・アーカイブの取り組みと研究が報告され、デジタル・アーカイブ資料室の今後の活動に役立つ多くの情報が得られた。ハイデルベルク大学の研究者たちはネパールの資料、文化財のデジタル化、公開に関する取り組み、技法、使用ツールについて発表した。デジタル・アーカイブ資料室の発表内容としては、資料室全体の取り組みの紹介(発表者:ダシュ)、東南アジアの仏教系貝葉写本の撮影、入力、編集技法(発表者:スチャータ・スリセッタヴォーラクル<本資料室囑託研究員>)、チベット文献のデジタル化(発表者:三宅伸一郎<西藏文研究班研究員>)についての発表が行われた。10か国以上の150人以上の研究者が興味を持ち参加したことが、今後のデジタル・アーカイブ資料室の活動に大きな刺激を与える。

## 東京分室指定研究

宗教と社会の関係をめぐる  
総合的研究  
—社会的価値観における宗教の  
役割の解明—研究代表者・准教授 井黒忍  
(東洋史)

## 1. 研究会の開催

生死の問題と宗教との関係および宗教の社会的実践という問題を考えるため、外部より講師を招聘して下記の研究会を行った。いずれもオンラインでの開催となった。

(1) 2020年7月6日、寿台順誠氏(浄土真宗本願寺派光西寺住職)「現代の生老病死—引き延ばされる老病死と操作される生」

(2) 2020年12月7日、井川裕覚氏(上智大学大学院・関東臨床宗教師会代表)「臨床宗教師から考える仏教の現在と未来」

## 2. シンポジウムの開催

宗教と社会的マイノリティとの関係および公的空間における宗教の役割を考えるため、下記の公開シンポジウムを開催した。いずれもオンラインでの開催となった。

(1) 2020年10月25日、「日本仏教を生きる女性たち」。報告者は丹羽宣子氏(國學院大学)「法華経の世界」を生きる—仏教教理と生活世界の交錯する場に注目して」、山内小夜子氏(真宗大谷派開放推進本部)「女子の得度—近代大谷派における女性の位置と役割」、福島栄寿氏(大谷大学)「近・現代真宗大谷派の女性教化の特徴—その教説から読み解く」、コメントはダシュ・ショバ・ラニ氏(大谷大学)。

(2) 2021年3月13日、「近現代日本の監獄教誨と宗教」。報告者は繁田真爾氏(日本学術振興会PD)「戦前日本の監獄教誨—異端の教誨師の系譜から考える」、アダム・ライオンズ氏(慶應義塾大学)「戦後から現代の宗教教誨—教誨師のジレンマにみる—」、コメントは江連崇氏(名寄市立大学)。

## 3. 現地調査

地域における宗教と社会の歴史的関係を考えるため、「隠れ念仏」に関する史跡・史料の調査を実施した。日程は2020年11月14日～11月15日、出張先は花尾かくれ念仏洞、真宗大谷派願立寺、土橋かくれ念仏洞、真宗大谷派鹿兒島別院、鹿兒島県立博物館、黎明館。参加者は青柳英司、井黒忍、荻翔一、鍾宜錡。

## 2021(令和2)年度指定・一般研究研究組織一覧(追加)

■指定研究「西藏文献研究」嘱託研究員の追加 (2021.10.1付)

研究名	研究課題及び研究組織
西藏文献研究	研究課題 チベット語文献のデータベース化 研究代表者 三宅 伸一郎 研究員 三宅 伸一郎 (教授・チベット学) 上野 牧生 (講師・仏教学) 松川 節 (教授・人文情報学・東洋史学) 嘱託研究員 伴 真一郎 (2020年度西藏文献研究嘱託研究員) 李 学竹 (中国藏学研究中心研究員) <u>U・エルデネバト (モンゴル国立大学教授)</u> 研究補助員 (RA) 三輪 悟士 (博士後期課程第1学年)

■科研費採択に伴う一般研究班の発足 (2021年8月30日付)

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
一般研究(許班) 【2021～2022年度「科研費」採択】	研究課題 国際移民のホームランド維持に関する研究：中国朝鮮族移民による母村への遠隔地参加 研究代表者 許 燕華 (任期制助教・特別研究員)

# 2021 (令和3) 年度「一般研究」(新規採択課題) 研究目的紹介

## 個人研究

### 国際移民のホームランド維持に関する研究: 中国朝鮮族移民による母村への遠隔地参加

研究代表者・任期制助教 許 燕華  
(社会学/東アジア地域研究)

本研究は、国際移民のホームランド維持に関する研究である。

従来の移民研究では、移民受入側に対する研究が中心であり、移民送出側、なかでも移民送出後の社会変容に焦点をあてた研究は少ない。既存の(送り出し側)ホームランドに関する研究は大きく2つに分けることができる。1つは、生活の場を完全に受け入れ側に定めており、数世代にわたり滞在している人々(ユダヤ人を代表的事例とするディアスポラ)にとってのホームランド研究である。ここでのホームランドはイデオロギー的な想像のなかのものである。2つは、意図的・非意図的であれ、生活の場はまだ定めておらず、定期的・非定期的に受け入れ側と送り出し側を行き来したり、場合によっては第三の場所へ移動したりする人々にとってのホームランド研究である。ここでのホームランドはバーチャルな「トランスナショナルなネットワーク」など抽象的なものか、あるいは海外送金・国家レベルでの政治参加など実態はあるものの移民とホームランドの関係は支える/支えられる関係であり、移民はホームランドの実際の運営には関与しない(できない)と認識されてきた。

本研究では、移民が直接ホームランドにかかわるといふ関係性を研究する必要性を提起し、かかる移民とホームランドの関係を研究するための事例として、中国朝鮮族の農村社会に着目する。

具体的には、日本、韓国、中国という3つの国における中国朝鮮族を対象に、ホームランド意識、ホームランドとの実際のかかわり方、近年の中国の少数民族政策と農村政策の変化及び新型コロナウイルス感染症による影響を考察する。

中国朝鮮族農村の生き残りの状況を明らかにすることは、崩壊しかねないほど移民現象が進展してしまったときに、ホームランドをどう運営するのか、なぜホームランドを維持するのか、どうすれば維持が持続するのかという問いに答えることになり、移民研究の「実験室」的事例としての重要な貢献となる。

## 2020（令和2）年度「一般研究」研究成果概要

### 共同研究

#### 変動帯の文化地質学

研究代表者・教授 鈴木 寿志  
(文化地質学)

文化地質学の科研費（基盤研究(B)）は4年目を迎え、真宗総合研究所では6名体制で共同研究を行った。昨年度、文化地質研究会第3回学術大会が新型コロナウイルス蔓延のため中止となったことから、今年度は代替企画として9月～12月の間に月1回のオンライン講演会を開催した。それらは、以下の通りである。9月12日：原田憲一「文明転換に果たす文化地質学の役割」

10月11日：吉川宗明「岩石に神はどのように宿り、宿らなかったか — 『古事記』『日本書紀』『風土記』を例に—」

11月28日：貴治康夫「加茂川石：樂焼茶碗の釉薬に使われた丹波帯緑色岩」

12月26日：岡本 研「石と人間」の教育実践」

各々の研究では以下の成果をあげることができた。大湯環状列石の調査 [鈴木寿志]：縄文時代後期に作られたとみられる、秋田県の万座環状列石と野中堂環状列石を訪れた。岩石種は石英閃緑玢岩とされているが、一部同質の火山礫凝灰岩や花崗岩質岩が用いられていることを確認した。

欧州文学と地質学 [廣川智貴]：ドイツでも定評のある『メッツラー文学シンボル事典』を手がかりとし、文学研究者の地質（岩石・鉱物）へのアプローチ方法を、とくに地質学者に向けて紹介した。

仏教の結界石 [清水洋平]：奈良の唐招提寺へ赴き、戒壇堂の周囲だけではなく寺域外にも結界石が残っていることを確認した。日本では結界石の概念・役割が時代とともに大きく変遷していることが分かった。

子どもと地質 [梅田真樹]：子どもと自然との関わり方の例として、身の回りの岩石への興味に関する事例観察を行った。また都市部の砂の中に含まれる重金属について調べ、子どもが遊びの中で摂取する可能性を指摘した。

地質学の普及 [大井修吾]：滋賀県を代表する地質の見どころである田上ペグマタイトを広く紹介するために、報告書「琵琶湖博物館研究調査報告33号：田上ペグマタイト」の編集作業と執筆を行った。

但馬地域の石材 [石橋弘明]：兵庫県北但馬地域に分布する近世・近代石造物の石材産地特定の研究を行い、新たに花崗岩類石材1種類について産地を特定した。

### 共同研究

#### 地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開

研究代表者・教授 西村 雄郎  
(地域社会学・コミュニティ論)

本研究の目的は、地方の社会解体的危機が進む中で、地域固有の生活原理として示される〈地域アイデア〉を基底におき、地域住民が自律的、内発的に形成している複数のサステナブルなく地域生活文化圏〉の特質を解明し、これを通して「新たな日本社会のあり方」を構想することにある。

このため第一に各圏域の歴史的形成過程及びそこに現れた〈地域生活文化圏〉の特質を、「地域自治」、「地域産業」、「地域文化」の三局面に着目し、各圏域固有の自然条件のなかで、これらが連関していかなる〈地域アイデア〉が形成され、いかなる〈地域生活文化圏〉が形成されてきたかを明らかにする。第二に、この〈地域アイデア〉を基層として、その上に形成された〈地域生活文化圏〉の現状分析を行う。ここでは、外部社会との係わりの中で、「住民」、「地域自治体」、「企業・協業体・協同組合」、「地域協働活動体」の4セクターが協働して、「地域課題」の解決を図り、新たな〈地域アイデア〉を生成させてきたプロセスと、そこに現れた各〈地域生活文化圏〉の特質を明らかにする。そのうえで、これらの研究成果に比較社会的考察を加え「新たな日本社会のあり方」を構想する。

2019年度は、この課題を達成するため1)研究成果を共有し、総合化を図るための共同研究会と、2)補充調査を行う予定であったが、2019年の新型コロナウイルス感染の広まりによって研究を中断せざるを得ない状況となり、2020年度まで研究を延長することとなった。

しかし、2020年度に入っても共同研究会や補充調査を行うことは困難な状況であったため、全共同研究者の研究成果をとりまとめる研究成果報告書を作成し、研究成果の共有化を図るとともに、オンライン会議を用いて研究課題を達成するための議論を行ってきたが、多くの問題が今後の課題として残されることになった。



## 共同研究

## 世親作『釈軌論』の総合的研究

研究代表者・講師 上野 牧生  
(仏教学)

本研究は、5世紀頃の北西インド文化圏で活動した世親（ヴァスバンドゥ）の手になる『釈軌論』の解読研究である。『釈軌論』は徳慧（グナマティ）の『釈軌論注』とともにサンスクリット原典の発見に至っておらず、また漢訳もなく、唯一、チベット訳が残されるのみである。

五カ年にわたる研究計画の四年目に当たる本年度は、『釈軌論』全章のテキストと下訳を整備することができた。さらに、本年度は研究計画が大きく進展した。それは、松田和信教授（佛教大学）が再発見した梵文貝葉写本『三啓集』から、『釈軌論』に引用され注釈される重要韻文と、『釈軌論』および『釈軌論注』に引用される阿含経典の重要経文の原文（平行例）を、数多く回収することができたからである。

本年度は、『釈軌論注』第5章に引用される中阿含『八難経』（『八無暇有暇経』）の全体を、『三啓集』から回収した（上野牧生「第29三啓経（八難経）の梵文テキストと和訳」『仏教学セミナー』111: 21-46, 2020）。本経は漢訳『中阿含経』、義浄訳『八無暇有暇経』、パリー・ニカーヤの *Akkhaṇasutta* と並行するが、説一切有部に属する本経の全文が回収されたのは今回が初となる。本経は、8つの無暇（仏の教えを聞き得ない境涯）と唯一の有暇（仏の教えを聞き得る「人間」という境涯）とをひとつずつ取り上げ、永く永い輪廻の隘路を経て「わたし」がようやく有暇に到り得たことを示すものである。そして「人間としての生まれを得ること」と「仏による正法の説示があること」のふたつを己の稀有としてうけとめ、「唯一の機会（有暇）を逃すな」と語る。いわゆる、「三帰依文」（開経偈）の冒頭句「人身受け難し」「佛法聞き難し」の淵源のひとつが本経である。

現代では「地獄・餓鬼・畜生などの無暇はあくまで比喩であり、人間の内的状態（不幸・飢餓・人倫に悖る反道徳など）を描写したものだ」と解説されることがある。しかし、世親にとってはそうではない。輪廻の渦中にあるものにとって、地獄などの有情は「現実」そのものに他ならない。つまり比喩表現ではなく、「この機会を逃せば、再び人間としての生まれを得て仏法に巡り合う確証はまったくない」とする自覚が、まさしく世親の内にあったと思われる。

## 共同研究

## 5～13世紀ユーラシア東方における都城と仏塔の比較史的研究と3Dアーカイブ作成

研究代表者・教授 武田 和哉  
(歴史学・考古学・人文社会情報学)

本研究は、日本や中国などを含むユーラシア東方の世界において、主として5～13世紀の時期を中心として各地に造営された都城と、仏教のシンボリックなモニュメントである仏塔に焦点を当て、双方の果たした役割や位置関係、モニュメントとしての特質などの分析を通じて、その背景にある当該時期の政治・経済および社会における仏教の在り方と、その歴史の変遷について、歴史学・考古学・仏教学などの各分野の立場から多角的視点での比較研究を行うことを目的としている。

2020年度は折からのコロナ蔓延の影響もあり、予定・計画等をしてきた国内外での調査活動はすべて中止にせざるを得なかった。代わって、研究班の各メンバーが個別にテーマと目標を設定しての研究活動を実施した。

研究活動についても、主にこれまでの調査・研究で得たデータの整理や、データベース作成のためのデータ収集を中心に実施した。また、研究班員とは個別に連絡等を取り、オンライン方式による意見交換会を適宜実施するなどして、今後の成果のとりまとめについての方向性についての議論・検討等を行った。

こうした経過を踏まえて、本来ならば2020年度が最終年の予定であったが、さらに1年間期間を延長することとし、2021年度において各種の成果とりまとめを行う方向とした。このために、その準備作業として専門分野の史資料の取り扱いができるアルバイトを雇用して、データ整理などの基礎的作業を実施した。

共同研究

歴史史料・考古資料活用による次世代作物資源の  
多様性構築に向けた学際的研究

研究代表者・教授 武田 和哉  
(社会学・考古学・人文情報学)

本研究は、東アジア食文化で重要な位置を占め、歴史史料に記載が多いアブラナ科作物を研究材料とする。アブラナ科作物は全世界各地で栽培され、東アジアの米主食文化圏では中心的副食である。近年、日本では伝統野菜が注目され、これら品種の保存を通じ、遺伝的多様性の重要度への認識が高まっている。

2020年度は折からのコロナ蔓延の影響もあり、予定・計画等をしてきた国内外での調査活動はすべて中止にせざるを得なかった。代わって、研究班の各メンバーが個別にテーマと目標を設定しての研究活動を実施した。

また、オンラインによる研究会議を下記のように3回開催し、今後の研究班の計画練り直しの議論、研究発表・質疑、情報共有などを行い、相互の連携等を維持することにも注力した。このほか、コロナ蔓延状況の推移を注視しつつ、日本近世古文書の分析を担当者による小規模人数での対面打ち合わせも1回実施した。

1.20年度第1回研究会 2020/6/16(火) 16:00-17:30

会議：「コロナ蔓延状況下における研究班としての活動方式の策定について」

その他：情報交換・共有等

2.20年度第2回研究会 2020/12/25(金)16:00～17:30

研究報告：武田和哉（大谷大学）「関西農業史研究会に参加して」

等々力政彦（大谷大学）「モンシロチョウと白菜の関係について」

その他：情報交換・共有等

3.20年度研究会議 2021/2/22(月) 15:30～17:00

研究報告：水谷友紀（京都府立大学）「水菜・壬生菜文献調査現状報告と今後の展望」

：渡辺正夫（東北大学）「異分野融合の難しさと諸問題」

会議「2020年度の研究活動の総括と今後の計画について」

その他：情報交換・共有等

4.20年度研究班・日本近世古文書分析担当者会合

2020/12/27(日) 15:00-16:00

開催場所：奈良県生駒市南コミュニティセンター  
会議「京都大学文学部所蔵近世地方文書の分析結果と今後の成果物化について」

共同研究

新出資料の調査と分析に基づく  
沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究

研究代表者・教授 福島 栄寿  
(近代日本仏教史・近代日本思想史)

2020年度の本研究班の研究活動及び研究成果は概ね以下の通りである。コロナ感染症拡大のため、本年度当初予定の研究活動の縮小を余儀なくされた。

①調査活動：2020年度は、沖縄県内等、数カ所での現地資料調査及び聞き取り調査を予定していたが、感染症拡大予防の観点のため中止した。

②研究成果：(1)学会発表：本研究班の研究成果を、第79回日本宗教学会学術大会（於：駒澤大学・オンライン開催・2020年9月20日）で、「明治初期琉球の真宗布教と『法難事件』に関する研究」と題して、福島が発表した。発表の要旨は、『宗教研究』94巻別冊要旨（258-259頁）に掲載されている。

(2)史料要旨及び翻刻の公開：真宗大谷派鹿兒島別院蔵「琉球国内務省出張所往復書藩庁往復並応接記綴込」の翻刻及び内容についての要旨を「【要旨】・〈翻刻〉真宗大谷派鹿兒島別院蔵『琉球国内務省出張所往復書藩庁往復並応接記綴込』(前)」として『真宗総合研究所研究所紀要第38号』(2021年3月)に掲載した。この「綴込」は、明治期琉球の「第三次真宗法難事件」における琉球藩庁側と東本願寺側の2回にわたる対談記録等、東本願寺本山宛上申書類の綴りである。当該期の琉球藩庁、東本願寺、明治政府の関係が視え、貴重である。翻刻は紙幅の都合で前半部分が大谷大学真宗総合研究所リポジトリに公開されている。同史料の翻刻の後半部分は同紀要第39号に掲載の予定。

③共同研究会の開催：(1)2020年9月9日、及び(2)2021年2月23日の2回にわたり、翻刻史料の検討、研究成果報告書の内容検討等を実施した。(2)では、高桑優和氏（大谷大院・修士2回）が、「明治初期の琉球における真宗大谷派研究序説」と題して研究報告をした。

④史料検討会の実施：2020年12月18日に、古書店図録掲載の史料『在琉球内務出張所往復並藩庁応接記』につき、本研究班・協同研究員知名定寛氏（神戸女子大学教授）の立ち会いで史料検討をし、大学博物館での購入が決定した。その後、研究班で同史料の翻刻作業を行い、2回目の共同研究会で内容について検討を実施した。

⑤研究期間の延長：予定の研究活動縮小のため、研究期間を当初予定（3年間）の2021年3月末までを2022年3月末までに、一年間延長することとした。

## 共同研究

## 西洋哲学の初期受容とその展開

## —井上円了と清沢満之の東大時代未公開ノートの公開—

研究代表者・教授 村山 保史  
(西洋哲学・日本哲学)

本研究は、井上円了と清沢満之の遺稿（複数のノート）から発見された東京大学在学時の外国人哲学教師（フェノロサ、ノックス、ブッセ）による未公開講義録とそれに関連する学習録の公開作業を通じて日本における西洋哲学の初期受容の一形態を解明し、あわせて、その後の井上と清沢の思想発展過程の一端を解明することを目的としている。そしてこの目的を果たすために以下の3つの課題を設定している。研究課題1a：東洋大学が所蔵する井上の哲学関係ノートを公開すること。研究課題1b：大谷大学真宗総合研究所が所蔵する清沢の哲学関係ノートを公開すること。研究課題2：東京大学の最初期の哲学教育が私立大学の教育にどのように継承されたのかを哲学館（東洋大学の前身）と真宗大学（大谷大学の前身）における教育内容の確認を通じて解明すること。

2020年度は1bを重点課題とし、1aと2についても並行して研究を続けた。

具体的には、重点課題とした1bについて、清沢のノートに含まれていたフェノロサの「哲学(史)」講義のヘーゲル以降部分の仮翻刻・翻訳を作成するとともに、ブッセの「哲学(古代哲学史)」講義の後半部分の翻刻・翻訳（「ブッセ「古代哲学史」講義(二) —清沢満之ブッセ講義自筆ノートの翻刻・翻訳—」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第38号、2021年）と、ノックスの「倫理学」講義の前半部分の翻刻（「ノックス「倫理学」講義(一) —清沢満之ノックス講義自筆ノートの翻刻—」『大谷大学研究年報』第73集、2021年）を作成して公開した。ブッセとノックスの講義録が公開されるのはこれがはじめてのことである。

1aについては、井上と同級生であった金井延の筆記による未公開のフェノロサ講義録（複写のみ入手しているもの。原本はイエール大学バイネッキ稀覯本図書館蔵）の仮翻刻作業を終えた。

2については、三浦節夫（執筆責任者）『チャレンジャー・井上円了—自分の運命は自分で拓け—』（『井上円了の教育理念』東洋大学、1987年を全面的に改訂したもの）の原稿を作成した。これは2021年9月16日に東洋大学から出版され（全256頁）、2021年度から東洋大学における理念教育の教科書として使用されている。

## 共同研究

## モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究

研究代表者・教授 松川 節  
(人文情報学・東洋史学)

本研究は、2016年より三年計画で実施した一般研究「モンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学融合的研究」の成果をさらに発展させ、1) 大ブルカン・カルドゥン山とチンギス・カンを結びつける歴史資料及び現地伝承を博捜し、チンギス・カン陵墓所在地について歴史文献学的な結論を提示するとともに、2) 大ブルカン・カルドゥン山の保存・保護、観光マネジメントに関して文化遺産学的研究を行い、3) この貴重な遺産を過去から未来へといかに継承していくかを共同研究によって明らかにすることを目的とする。

2020年度は新型コロナウイルスの蔓延により、予定していた全ての現地調査を先送りにせざるを得なかった。そこで、上記1)の「現地伝承」を共有する目的で、既発表のモンゴル語による関連論文の日本語訳を以下のように作成し、オンラインで共有した。

S. チョローン「ブルカン・カルドゥン山についてのモンゴルの学者の研究」、Kh. ベルレー「イフ・ホリグはどこにあるのか」、Z. バトサイハン、N. ダワー、Zh. ボル「テンゲリーン・オボーは大ハーンの墓か」。

また、日本語で著された関連研究論文をモンゴル側研究者と共有する目的で、以下の論文のモンゴル語訳を作成した。

加藤晋平「調査報告：モンゴル国ゴルバン・ゴル＝プロジェクト調査について」、白石典之「モンゴル部族の自立と成長の契機—10～12世紀の考古学資料を中心に—」、白石典之「チンギス・カンの墓」。

その他、モンゴル側共同研究者との共同研究としては、2021年3月19日（金）にオンラインで成果報告会を開催し、モンゴル側研究者B. ツォクトバートル（モンゴル科学アカデミー考古研究所）、B. ハシマルガド（モンゴル国自然環境省ハン・ヘンティ特別保護行政局）より研究成果の報告を受けた。

共同研究

中国唐代・道綽浄土思想の  
基礎的研究

研究代表者・准教授 Michael J. Conway  
(真宗学)

本研究は、道綽の浄土教思想を、同時代の仏教界の状況と仏教思想に鑑みて捉え直し、道綽の思想の独自性と革新性を多角的に解明しようとするプロジェクトである。2020年度は3年間の研究期間の2年目に当たる。

本プロジェクトの研究活動は二種類の研究会の開催を軸に展開されている。一つ目は英文と和文による『安楽集』の詳細な訳注を作成し、検討する研究会である。本学を会場に二週間に一回程度で開催される。この研究会には、研究分担者および研究協力者が参加し、古写本による『安楽集』のテキスト校訂および確定を行い、訓読と現代語訳を検討し、確定していく。

二つ目は、道綽および『安楽集』の歴史的意義に光を当てる講師の研究発表を中心とした公開研究会である。

新型コロナウイルスの流行に伴い、2020年度の活動は予定より大幅に縮小された。本学の入校制限を受けて、前期に予定されていた訳注研究会のほとんどを中止した。また、6月末の再開後にはオンライン会議ソフト（Zoom）を利用し、研究分担者と研究協力者が遠方から参加できるようにした。

訳注研究会は13回、開催し、『安楽集』第二大門第二の最初の細科まで、訓読文および和文と英文による現代語訳を作成し、検討した。公開研究会は3回、開催し、以下の通りの発表を行った。

公開研究会は、本学の参加者を研究班関係者に限定し、オンライン会議ソフト（Zoom）を利用した形で公開し、3回のみ開催した。

2020年7月25日（土）

「道綽の往生浄土説について—『安楽集』における二説説と有相・無相との関わりを中心に—」

杉山裕俊氏（大正大学 非常勤講師）

2020年9月15日（火）

「唐代西方浄土変と道綽」

大西磨希子氏（佛教大学 教授）

2020年12月19日（土）

「諸行の分類をめぐる隋代仏教の一側面—道宣の著作中に引用される『凡聖行法』とその意義—」

戸次顕彰氏（大谷大学 講師）

共同研究

地方社会の解体的危機に抗する  
〈地域生活文化圏〉の展開と課題

研究代表者・教授 西村 雄郎  
(地域社会学・コミュニティ論)

本研究の目的は、地方の社会解体的危機が進む中で、政府が「選択と集中」をキーワードとして地方再編を推進していることに対抗し、各地域がもつ自然・歴史・文化の中で育まれた地域固有の生活原理である〈地域イデア〉を基底におき、地域住民が自律的、内発的に形成しているサステナブルなく地域生活文化圏〉の特質を解明し、これを通して「日本社会の新たなあり方」を構想することにある。

この課題を達成するため、本研究チームは2014 - 2016年度（「地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉形成の可能性」と2017 - 2019年度（「地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開」）に科学研究費基盤研究（B）をうけ、研究対象として設定した北海道十勝地域、宮城県大崎地域、京都府綾部地域、大分県日田地域の4圏域の調査研究を行い、その成果を研究報告書にまとめた。第1期では各圏域の地域活動の事例的分析を行い、第2期では事例研究を深めるとともに、それらの活動の〈地域生活文化圏〉における意味づけに分析を加え、研究対象地域の特質を明らかにしてきた。

本研究では、これまでの研究を補う調査研究を行いながら、一方でその地域的特質がいかに歴史的かつ構造的に形成されてきたかを深く問い、他方で生活者によって生きられてきた〈地域イデア〉の変化をとらえ、この成果に比較社会学的考察を加えることによって「危機に抗する〈地域生活文化圏〉展開」の可能性と課題を明らかにし、それによって「日本社会の新たなあり方」を構想していきたいと考え、研究計画をたてた。

しかし、コロナ禍に伴い、2020年度は調査対象地における調査、共同研究者との共同研究会の開催などを行うことができず、研究は停滞している。2021年以降、研究計画に沿った研究ができるよう共同研究者一同準備をすすめている。

## 共同研究

## 支援が必要な子どもと親のための光・音・匂い環境を用いた『親子の遊び空間』の開発

研究代表者・准教授 井上 和久  
(特別支援教育)

本研究は、発達障害のある子どもの発達支援と保護者の心理的支援の両方を家庭の場で可能にするため、光や音を発する器材、心地よい触感覚のおもちゃなどにより、光、音、香り、触感覚などを取り入れた「親子の遊び空間」について、家庭に導入しやすいモデルを開発し提案する。「親子の遊び空間」は、スヌーズレンの手法を取り入れ、光や音を発する器材、おもちゃなどにより、自宅の部屋の中でスヌーズレンルームと同じような空間を作り出す。安らぎを感じる空間で親子が遊びを通して、母子相互が刺激し合い共感し合う時間を体験しながら母子の安定的な遊びを形成することを目的に研究を進めている。2020年度については、母子の遊びの実態調査と遊び空間の開発のための器材の開発、遊び空間で使用できる絵本の効果の検討を行った。母子の遊びの実態調査については、「親子の遊び」について文献レビューを行うとともに、発達支援事業所に通園する5人の幼児の母親に対して、子どもの屋内での遊び、外遊び、「遊び」での子どもへの関わりについてインタビュー調査を実施した。インタビュー調査の結果から、発達障害等により療育等の支援を受けている幼児の母親は、遊びの中でも子どもの発達を促すための何らかの工夫を意識的に行っており、子どもと一緒に遊ぶ中での子どもの笑顔や行動などから喜びや楽しさを感じていた。その一方で発達障害等の特性からくる子どものこだわりや衝動性等への対応に苦慮している状況が窺えた。遊び空間の開発のための器材の開発については、発光器材の開発と可搬式パルチューブの家庭での使用について提案を行った。「親子の遊び空間」で使用できる発光器材の開発として、天蓋（キャノピー）に光ファイバーを編んだボール形状のものを仕込むことにより、家庭等で親子だけの空間が実現できるようにした。天蓋（キャノピー）を活用することにより、リラックスした中で親子のコミュニケーションを深めることができるものと考え開発を継続する。また、児童福祉通園施設に「ひかる紙芝居」の提供し、通常の紙芝居との反応の違いについて保育者による評価を行った。結果として、離席する子どもが少なく保育士の評価が高かった。今後は、「親子の遊び空間」を構成する器材やおもちゃやグッズの選定を行い、空間を提案する。

## 共同研究

## 東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係の解明と国際的連携体制の構築

研究代表者・名誉教授 加来 雄之  
(真宗学)

本研究は、標記の研究課題にそって、第1回目の公開国際シンポジウムを、2020年6月に大谷大学のメディアホールを会場として開催する予定であった。しかし新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミックの影響により、度重なる開催の延期・形態の変更を余儀なくされ、最終的にはZoomによるWeb会議方式で、2021年2月20日（土）一日間の日程で、中国、台湾、韓国、日本からの研究者によるオンライン会議として公開国際シンポジウム「東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係—中・朝・日の思想家たちの証言—」を実施した。このような状況の中でも26名の参加があった。シンポジウムでは、7名の研究者によって日本、中国、台湾、朝鮮の近代化においてオピニオン・リーダーの役割を果たした8人の思想家がとりあげられ、専門性の高い研究発表がなされた。のみならず、それぞれの発表内容について造詣の深い研究者に司会進行・コメントを依頼できたことにより大変充実したものとなった。本研究の研究成果の一端として、シンポジウムの趣旨、研究論文、発表者・司会者など全体の様子については以下の研究成果報告に掲載したので参照してほしい。またシンポジウムの終了後に設けたWebにおける懇親交流の場を通して、今回は、思想家個人の研究が中心に報告されたが、今後は、国を超えた相互交流や影響関係に焦点を当てることや、統一のテーマ（たとえば「業」の問題など）を立てて議論を深めていくことなどの提案がなされた。あわせて次回のシンポジウムを、台湾か、韓国の大学において開催する準備をすすめることも確認されるなど、研究班の一つの目的であった東アジアにおける研究サークルの創出という目的もある程度果たすことができた。

本シンポジウムの七名の研究発表者のうち、外国人研究者4名の研究論文は「公開国際シンポジウム「東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係—中・朝・日の思想家たちの証言—」」として『大谷大学研究年報』に、また日本人1名の論文は『親鸞教学』に掲載される予定である。

## 共同研究

### 人口減少社会の持続可能性と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究

研究代表者・教授 木越 康  
(真宗学)

本研究班の目的は、人口減少のさらなる進行の中で様々な問題が深刻化する地域にあって、真宗学・宗教学・社会学・歴史学・民俗学などの複数の学問分野の知見や分析方法を用いながら、過疎地における地域社会および仏教寺院の現状と課題を把握し、今後の地域社会における仏教寺院の社会的役割を明らかにすることである。また、本研究班は、2017年度から2019年度まで大谷大学真宗総合研究所特定研究「新しい時代における寺院のあり方研究」として取り組んできた調査研究の目的、問題意識、成果等を引き継ぎ、調査研究活動をおこなってきた。

これまで2017年度から継続的に岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区の調査をおこなってきたが、本研究班では、春日地区からの「他出門徒（他出子）」に焦点をあて、聞き取り調査を計画した。しかし、2020年2月から世界的に感染拡大をみせたCOVID-19の影響によって、従来通りの「対面による聞き取り調査」がかなわなかった。それゆえ、計画を練り直し、オンラインによる聞き取り調査の可能性をさぐることとなった。

今回計画していた「聞き取り調査」は、デジタルデバイスに不慣れな方が多い高齢者層（70代、80代）に対するものであったため、オンラインによる聞き取り調査の具体的な方法を計画する際、様々な工夫や配慮が必要であった。結果として2021年3月に3名の他出門徒の方からオンラインによる聞き取り調査をおこなうことができた。この調査における具体的な方法、様子およびその調査方法の検証は、別稿にて公表される予定である。

ここでは、本研究班における研究成果の一部として特に二点をあげておきたい。一つ目はCOVID-19の収束が見いだせない現状において、限定的にはあれ、対面での調査方法に代替しうる選択肢の一つとしてオンライン聞き取り調査を探索的に実施することができたことである。二つ目は、その方法と検証の内容を他の研究者に共有しうる手があり、材料を得ることができた点である。今回のオンライン聞き取り調査によって得られた情報は、2021年度より科学研究費による一般研究（木越班）の研究活動において、活用していく予定である。

## 個人研究

### ダンス教育で育てるからだを問う～ソマティクスとボディ・ワークのかかわりから

研究代表者・特別契約教授 原田 奈名子  
(体育科教育学)

COVID-19のため、実践系の研究はほとんどできなかった。加えて、海外における研修やリサーチも一切できなかった。ではあるが、以下のことを実施した。

2019年度に、3人の舞踊教育研究者が同じボディ・ワークを体験し、その振り返りを以下の観点「からだに起きたこと・からだを経験したこと」、それから一定の期間を経て「考えたこと」を記述して論文にまとめた（『一人称で語るBMC（Body-Mind Centering〇R）体験—教育における「振り返り」を問う—』大谷大学初等教育学会研究部紀要、第2号：101-117）。これより、「自らが自らの身体をどう体験しているかを明らかにする」方法が、本テーマ「ダンス教育で育てたいからだ」の具体的な方策になる可能性について示唆を得た。それを踏まえ、8月と9月に、舞踊教育者に指導を依頼し、研究代表者原田と共同研究者大橋、他2名の協力を得て、4名が受講した。その際、上述した観点による記述を求め、資料を得た。しかし、論文にまとめるには至っていない。従来から、ダンス教育の実践においては、学習者にフィードバックの記述を求めてきたが、上記のような問い方をしてこなかったことから、今後も学習者への問いかけを吟味し、実証していくことが課題であると考えている。

全員が12月開催の二つの学会に参加した。舞踊教育学会では、橋本有子氏による「ソマティック・ムーブメント/ダンス ワークショップ—内と外のつながり」に参加した（Zoom）。1月に、舞踊学会で発表された吉田美和子氏を招いて、「ソマティクスにおけるダンス—エリック・フォーキンスからボニー・ベインブリッジ・コーエン—の系譜を辿る—」についてご講演をいただき、研究討議の機会をもった（Zoom）また、3月に共同研究者村越に、海外研修成果の一部として「マーサ・エディのソマティック実践—ニューヨーク研修からの調査報告—」の報告（Zoom）を頂き、知見を深めた。

コロナ禍ゆえ、学会もワークショップもonlineになった。その中で、原田はボニー・ベインブリッジ・コーエン氏のonline連続講座や他の複数の連続講座受講して、研修した。村越はソマティック・ムーブメント・サミット、BMCサミットに参加した。

## 個人研究

東南アジア大陸部で発展した積徳  
行文献の体系解明

研究代表者・特別研究員 清水 洋平  
(仏教学・南伝仏教)

本研究では16～19世紀の東南アジア大陸部：特にタイで発展し、独自に編纂された積徳行という宗教的実践を勧奨する文献：アーニサンサの中で、タイ仏教の特徴的な現実相との対応が明らかな本研究に適する代表テキスト『サツバダーナ・アーニサンサ』を取り上げてきた。同テキストについては、昨年度までに、同名で同系統の内容を有する貝葉写本が種々に存在することを明らかにした。すなわち、コム文字(主としてパーリ語を記述するために使用された初期クメール文字)パーリ語で記された10束からなる写本、コム文字パーリ語で記された1束からなる写本、コム文字タイ語で記された1～2束からなる写本の3種であり、その内容の比較研究を実施してきた。その過程で、コム文字タイ語で記されたものは、その内容に複数のバージョンがあることが判明し、更なる研究の必要性が生じた。よって、本年度はコム文字タイ語で記された『サツバダーナ・アーニサンサ』について、第1級王室寺院ワット・アルンラーチャワラーラム、第2級王室寺院ワット・ホンラッタナーラムにそれぞれ所蔵されていた1束或いは2束からなる写本の収集済み画像資料を活用し、それらのタイ文字転写、ローマ字転写、及び翻訳研究に着手した。なお、コム文字タイ語で記されている写本の文章は、パーリ語の単語をまじえながら古いタイ語で書かれているため読解が極めて困難である。そのため、タイ在住の研究協力者の支援を受け、タイ文字に転写して現代タイ語からの内容理解に努めた。

また、『サツバダーナ・アーニサンサ』以外にも、タイ仏教の特徴的な現実相との対応が明らかなアーニサンサのテキストは種々に存在する。本年度は、それらの中からタイの伝統行事として有名なソクラン(水掛け祭り)の功德を説くものなどについて、ローマ字転写、翻訳研究に着手した。

## 個人研究

『甚深伝』校訂と解析によるミラ  
レーパの仏教思想の解明

研究代表者・特別研究員 渡邊 温子  
(仏教学・チベット学)

本研究の最終的な目的は、ミラレーパの仏教思想を再構築し、彼の思想を解明することである。それにより、チベット仏教後伝期における仏教開花についての基盤研究を提供する。上記の目的を達成するために、現存する諸ミラレーパ伝の原型である『甚深伝』を研究対象とし、現在入手・閲覧可能な写本を用いて①校訂本の作成、および②翻訳研究を通じた文献分析により新たな研究モデルを構築する。

2019年5月1日から引き続き、2021年3月31日まで産前産後の休暇、育児休業を取得し研究を中断した。今後は、①校訂本の作成に向け、ニューアーク版とオックスフォード版写本の複写資料を、すでに入力を終えた北京で出版された活字本『甚深伝』のテキストデータと校訂する。②『甚深伝』翻訳研究と並行して『ミラレーパの十万歌』との異同の確認及び、チベット語辞書にみられない難語の収集を行う。

個人研究

認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開  
—「主体論」を超えて

研究代表者・特別研究員 翁 和美  
(社会学・文化人類学)

本研究は、主体論として展開されてきた従来の介護論を「相互了解世界アプローチ」(以下、新モデル)へと刷新する道筋を示すことを目的としている。新モデルは、研究代表者がそれを見出した社会では正当に評価されていない。一方、新モデルを高く評価し始めている社会があり、比較することで、家族介護を基礎に据える地域主義の介護との混同が、新モデルの正当な評価の妨げになっていることを明らかにしてきた。そこで、新モデルが正しく機能すれば、家族の枠組みにとどまらず、個別の主体を圧迫しない未来志向の開放性の高い劇場の空間さえ、成立し得ることを次の2つの論文で明らかにした。一つが、「医療の場の「日常生活世界」アプローチと拡張型劇中劇」(松田素二他編『日常実践の社会人間学—都市・抵抗・共同性』山代印刷株式会社出版部、2021年3月、pp261～pp274)であり、もう一つが、「『出会う』老人の性とセクシュアリティ」(松田素二とゆかいな仲間たち編著『雑草たちの奇妙な声—現場ってなんだ?!』風響社、2021年3月、pp273～pp296)である。

新モデルの基盤となる医療の場と「日常生活世界」を接合する試みは、主体を攪乱したとしても個別性を圧迫しない。上記の2つの論文では、それを新モデルの機能的側面から立証したが、一方で、各土地が持つ時代と歴史の記憶は、程度の差はあれ、個人の記憶と重なる点からも明らかにできる。新モデルでは、ユニット・ケアと回想法と過去の環境の再現の3つの方法論が「日常生活世界」アプローチとして昇華している。そこで、新モデルを見出した地域が持つ時代と歴史の記憶を収集する社会踏査を開始した。地域が持つ時代と歴史の記憶をとどめる展示物や伝統行事と展示の仕方や見せ方と日常生活との関連に注目し、調査を進めている。

一方、新モデルを正当に評価しない社会で、医療の場と「日常生活世界」を接合する試みを個人で始めた看護・介護従事者の活動を追う調査も本格的に開始した。調査を進める中で、当該地域では、むしろ、介護は「日常生活世界」とともにあり、それが医療・介護制度に組み込まれることで、「折衝」が生じ始めていることが見えてきた。そこに、反証的に、新モデルへと刷新する道筋を示す手がかりを得つつある。

個人研究

タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響

研究代表者・准教授 西川 幸余  
(応用言語学)

タスク・ベース言語指導 (Task-Based Language Teaching) では、学習者は目的言語の使用で意味に焦点を置きながら、個人、ペア、グループなどの学習形態でタスクに取り組み、言語習得を促すことを目的とする。タスク活動時、認知能力の観点から、タスク条件は学習者の言語運用に影響すると考えられている (Skehan, 2018)。タスクによる言語活動は、1度きりの活動にとどまらず、繰り返し学習を取り入れることにより、語学力の向上につながるとして研究がおこなわれている (Bygate, 2018)。外国語学習における言語活動では、インプットの種類や条件といった認知プロセスを考慮し、学習者の言語能力とニーズに応じたタスクの考案が重要となる。

本研究では、スピーキング・タスク条件に、①「繰り返し学習」と、②「異なるインプット (文字情報、あるいは視覚情報) の使用」を取り入れ、繰り返し学習の効果とインプットのスピーキングへの影響について調査し、効果的な繰り返し学習の指導方法とインプットの役割について明らかにすることが目的である。参加学生にスピーキング・タスクに取り組んでもらい、タスク終了後、タスク活動を振り返るインタビューを実施した。

中間報告として、参加者の振り返りインタビューから、学習者のタスク学習への気づきについて定性的分析の結果をまとめた。2グループの気づきにおいて顕著な点は、input から output への過程で受け取った input の認識とその活用についてである。文字情報を受け取り発話したグループは、input 情報で得た難しい単語をスピーキングで思い出し活用できたと、Priming (McDonough & Trofimovich, 2009) 効果がみうけられた。視覚情報を受け取り発話したグループからは、短期記憶に絵の情報が鮮明に残り、絵の情報媒体を通じて自分が使える単語の認識があったと、習得単語の思い出しとその活用に関する気づきのみうけられた。タスクを繰り返した際、個人が必要とする部分 (単語、文法、絵情報) に意識を向けて input 活動を行い、スピーキングに取り組む傾向があることが明らかになった。引き続き協力参加者を募り、データ収集と分析を行い、英語指導に役立つタスク考案への提言に向けて研究結果の考察とまとめに取り組む。



## 個人研究

生活困難状況にある若者への離家支援としての  
共同生活型支援の実態及び有効性の検討

研究代表者・講師 岡部 茜  
(社会学/社会福祉学)

本研究は、現在、日本の各地でおこなわれている居住支援を伴う若者支援の実態を把握するとともに、社会福祉学で蓄積されてきた施設での生活支援の視点から、その有効性を検証することを目的としている。2020年度は、①若者支援制度の変遷の分析をおこなうこと、②2018年度・2019年度に実施してきた調査を継続し、全国の共同生活型若者支援の実践者に事業に関するインタビューを実施すること、③若者支援機関に相談があった事例で居住支援が求められた事例を収集しその分析をおこなうこと、の三つの課題に取り組んだ。Covid-19の流行により、①の課題にとりわけ集中的に取り組んだ。

①政策分析から、1990年代以降の若者の状況を分析する主要な枠組みであり、若者支援政策へも強く影響を与えた移行期研究が、学校から企業へ、出生家族から生殖家族あるいは一人世帯へとといった移行という前提を持つものであったために、若者支援政策が「生活の困窮」ではなく、「移行の困難」を焦点としていたことを整理した。また現状の若者支援政策が若者の既存社会への同化を志向しつつ、同化しうる制度を持たないために、食べ吐きする制度になっていることを確認した。さらに、社会福祉制度の仕組みが若者に求める家族依存と稼働依存の生存方法を乗り越えるために、どのような支援体制が検討しうるかを海外事例も含め資料から検討した。(成果は、以下として報告した。「新自由主義的統治に抗する若者ソーシャルワークの課題」『立命館大学産業社会論集』2020年/「若者を食べ吐きする『若者自立支援政策』」『大原社会問題研究所雑誌』、2021年)

②調査から、2019年度には居住支援を伴う若者支援の特徴を三つの時期区分で整理した。2020年度はさらに調査から事例を追加し、分析を進めている。通過型施設と非通過型施設で支援内容に違いが生じていることなども含めてさらに検討を加え、2021年度に調査報告および論文を投稿する予定である。

③調査から、児童福祉法下の制度の機能不全状況が明らかになりつつある。2021年度もCovid-19の流行状況を見つつ調査・分析を実施していきたい。

## 個人研究

儒教文化で捉える「孝」の表現と  
終末期医療倫理の再構築—日本と  
台湾の比較を中心に—

研究代表者・東京分室 PD 研究員 鍾 宜錚  
(生命倫理学)

本研究は、終末期医療に関わる意思決定と延命治療をめぐる家族の葛藤を分析し、終末期における「孝」の表現を検討するとともに、親子の関係性に基づいた終末期医療の倫理原則を提示することを目指している。台湾では、年老いた親の代わりに家族が医療方針を決定することが珍しい事象ではなく、親を最後まで看取ることが「孝」を実践する上で重要な行為であると捉えられている。その上、儒教文化では、親が亡くなった後の葬送儀礼が重視されており、自宅で死を迎えることを重んじる傾向がある。先祖代々が祀られる家で死を迎えることを「善終(善い死)」とする文化があり、それを尊重しながら医療との関わりを模索するのは現代社会の課題でもある。

本研究は、こうした人生の最期をまつわる文化と医療との関係性を探求し、終末期医療の法制化の議論に見られた「孝」の語りと終末期医療の意思決定で現れた「孝」の内実を検討している。本人と家族との関係性、とりわけ親子という関係性の中で見られた倫理性を明らかにする。2020年度では、主に終末期医療における意思決定、とりわけアドバンス・ケア・プランニング(Advance Care Planning、以下、ACPと略)の使用について日本と台湾の状況を考察した。新型コロナウイルス感染症の流行により、海外への渡航が大幅に制限された中、研究方法は文献調査を中心に行っていた。具体的な研究成果として、まず台湾の「患者自主権利法」によって法制化されたACPの実施状況と終末期医療現場で見られた「孝」の実践をテーマに、オンラインで開催された国際生命倫理大会(World Congress of Bioethics 2020)で発表した。同法の実施により、終末期以外の患者にも事前指示書による延命治療の差し控え・中止が認められているが、事前指示書を作成する際に行うACPの費用は高く、一部の希望者しか利用できないとの批判がある。また、ACPの実施には家族の参加が必要と規定されていることから、本人と家族との合意形成に医療従事者はどのように介入するべきか、といった課題が残っている。また、新型コロナウイルス感染症の流行により、終末期医療に対して社会的意識に変化の有無についても、さらなる研究が必要である。

個人研究

Towards the Development of a Critical Learning Support System for Primary School Teachers of English

小学校で英語を担当する教師に向けてのクリティカルな実践共同体の構築に向けて

研究代表者・准教授 Ryan W. Smithers  
(外国語教育・言語学・英米文化)

本研究の目的は小学校の英語教育の実態調査及び小学校で英語を担当する教師が英語を教える上で何を必要であると感じているかを調査することです。京都市内の159校の小学校を対象に現在使用されている教材、その内容を分析し、教師へのインタビューを通してどのような教材(resource)、専門的支援(professional support)が適切及び効果的であるかを調べ、何が不足しているかを探究します。この結果を基に、小学校教師のために教材、専門的支援をオンラインで提供し、教師のクリティカルな学びを促すための持続可能および適切な実践共同体(community of practice)としてのオンラインスペースの構築を目指します。

本研究の成果が高等教育機関、教育委員会、文科省が小学校英語教育向上のためにどのように貢献できるか、その指針となることを望んでおります。

今年度の研究成果は、小学校の英語教育を対象として実施した教師の英語教育サポートのニーズ分析アンケート調査を利用して分析を行っていました。これからデータの分析を終えて、分析結果を共有します。

個人研究

日本の地方部における多文化化対応とローカルガバナンスに関する地域比較研究

研究代表者・准教授 徳田 剛  
(地域社会学)

本研究は、深刻な人口減少と外国人人口の増加が進む日本の地方部において、地域在住の外国人住民への言語・生活両面におけるサポート体制を充実させながら、多様なルーツを持つ人たちが地域生活への適応や社会参加を経て地元住民とともに地域を支える存在となっていくための条件整備とそのための方法論を探求するものである。

2020年度においては、新型コロナウイルスの影響により、調査対象地における資料収集やインタビュー調査を主要なデータ収集の手法とする本研究の遂行が非常に難しい状況にあった。その中であって、カナダにおける地方部への移民誘導型施策に関する英語文献の資料収集とその読解、愛媛県新居浜市における多文化共生の地域づくりの取り組みについての情報収集など、可能な範囲での情報収集を行った。

また、2019年度末に実施予定であった「移住と共生」研究会を、2021年3月にオンラインで開催することができた。以下、報告者と報告題目を記す。

2020年度「移住と共生」研究会

2021年3月6日(土)14時～16時

\* Zoomによるオンラインによる開催

1. 魁生由美子(愛媛大学)  
「地域福祉の多文化化－大阪市とその近郊における在日コリアン高齢者を対象とするデイサービス事業」
2. 村岡則子(聖カタリナ大学)・大黒屋貴稔(聖カタリナ大学)  
「日本における外国人介護労働に関する研究の動向」
3. 大黒屋貴稔(聖カタリナ大学)・梅村麦生(日本大学)  
「スペインおよび日本における移民政策について」

## 個人研究

キンギョから見る知覚統合の  
進化的基盤研究代表者・准教授 高橋 真  
(比較認知科学/推論/共感覚)

「明るい音」や「暗い音」は比喩表現の一つである。この比喩には、聴覚に対して別の感覚である視覚が結びついている可能性を示すものであり、共感覚と呼ばれる知覚現象に近いといえる。上記の比喩表現は共感覚的な知覚を言語で表現していることになるが、言語以外の行動側面でも共感覚的な知覚の存在を明らかにできる。例えば、特定の刺激（白）に対しては右、別の刺激（黒）に対しては左を選択する条件性弁別課題の遂行中に別の感覚様相の刺激（音）を提示すると、共感覚的な音と視覚刺激の組み合わせが一致する場合（白-高音、黒-低音）と一致しない場合（白-低音、黒-高音）で、促進効果、もしくは、妨害効果が生じるはずである。本研究は、言語を用いないヒト以外の種であるキンギョにおいてもこうした知覚現象が生じているかを調べることで、共感覚の進化的起源を説明することを目的としている。

2020年度においては、「明るい音」「暗い音」といった音の高低と光の明るさの共通性をキンギョも知覚しているかどうかを調べるため、5個体のキンギョに、明るい視覚刺激（白）と暗い視覚刺激（黒）に対する条件性弁別課題の訓練を行った。訓練は20試を1セッションで行い、5個体中4個体は学習基準（2セッション連続で80%以上の正答）に到達した（82-137セッション）。

学習基準に到達した個体に、テストを行った。テストは、1セッション24試行とし、訓練と同じベースライン試行（8試行）、視覚刺激と音刺激が一致する一致試行（8試行）と一致しない不一致試行（8試行）で行った。4000Hzの純音と1000Hzの純音を提示したテストと4000Hzの純音と500Hzの純音を提示するテストを各5セッション行った。

その結果、4000Hzと1000Hzの組み合わせのテストにおいては4個体中3個体が、4000Hzと500Hzの組み合わせのテストにおいては4個体中2個体が、一致試行において不一致試行よりも高い正答率を示した。ただし、統計的に意味のある比較のできる個体数ではないため、2021年度は個体数をさらに増やして比較を行う。

## 個人研究

## 民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望

研究代表者・准教授 田中 正隆  
(社会学・社会人類学・民俗学・アフリカ地域研究)

アフリカ諸国では2000年代以降、旧世代の元首の引退や三選禁止の選挙制度によって、政界の世代交代がすすんでいる。だが、変動期にあっても、アフリカでは年長者や一部の政治サークルによる政策決定権の独占が続き、一般民衆は政治論議に参加できなかった。本研究は、アフリカの民主化前後に生まれた二十~三十代の人々を「若者」として焦点化し、政権の世代交代にともなって、社会変革を求めて胎動する若者層の活動と今後の展望を明らかにする。

サブサハラ・アフリカの人口構成では、25歳以下の占める人口比は6割以上の多数派となる「若い大陸」と呼ばれてきた。だが、既存の優位集団の制約から、若者層は表舞台への順番がくるのを延々と待ち続ける待機状態 waithood におかれてきたため、近年、彼らはこれに声をあげ始めている。この事例研究として、ベナン、トーゴでのメディアを介した若者の活動を現地調査によってその実態を把握する必要があった。2019年末からのCOVID19禍の制限により、現地滞在調査が実質的に行えなくなった。研究継続の代替手段として、以下を模索した。

1. 既存資料の整理、再検討による研究成果の中間報告をすすめ、批判や反応をえること 2. インターネットなどの通信手段を介して現地ラポールの維持や限定的な情勢把握につとめること 3. リモートでのコミュニケーションを余儀なくされた(ベナン、トーゴ)国外の人々の活動を焦点化すること

こうした試みで得られた情報もふまえて、以下の成果としてアウトプットした。

『アフリカの聞き方、アフリカの語り方—メディアと公共性の民族誌』風響社

「ベナン、トーゴにおける意見する人の20年」日本アフリカ学会第58回学術大会口頭報告

「アフリカにおけるメディアとデモクラシー：ベナン、トーゴのラジオ・オーディエンスによる「参加するデモクラシー」」Sophia-Professional Studies Programs 講演

「Thirty years after the democratic transition in Benin, West Africa: The case of public opinion in radio call-in shows」IUAES Yucatan Congress 2021 in MEXICO 口頭報告

個人研究

社会改善活動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究

研究代表者・准教授 中野 加奈子  
(社会福祉学)

2020（令和2）年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、予定していたインタビュー調査を行うことが叶わなかった。しかし、ソーシャルアクションのあり方について考察を深めることができた。

一つ目は、日本社会福祉学会第68回大会において、「グローバル・ソーシャルワークの展開：新自由主義的グローバリゼーションに抵抗する理論と実践—SWAN-Iを中心に—」と題して発表した（日本福祉大学・伊藤文人教授との共同報告）。ここでは、新型コロナウイルス感染症が社会にもたらした諸矛盾を新自由主義的グローバリズムの進展と関わらせながら分析し、2020年4月よりSWAN-Iで取り組まれた活動内容の概要をまとめた。

二つ目は、「新・生存権裁判」における原告団・支援団体の形成過程—ソーシャルアクションとしての「裁判」（大谷大学真宗総合研究所『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第37号）と題して論文をまとめた。こちらでは、生活保護基準引き下げ違憲訴訟での原告団の形成過程を事例として取り上げながら、裁判という方法を用いたソーシャルアクションを「裁判アクション」として定義し、裁判アクションに取り組む意義を述べた。

また、「裁判アクションを通じた原告のエンパワーメント—パウロ・フレイレの視点から—」（大谷大学哲学会『哲学論集』第67号）においては、裁判アクションを通して原告が組織化される過程で、原告らがエンパワーメントされる過程をパウロ・フレイレの視点から考察した。

次年度においては、2020年度で検討した原告団の組織化の過程におけるエンパワーメントの実際をさらに具体的に明らかにすること、及び裁判アクションに参画する原告・支援者の生活史インタビューを通し、ソーシャルアクションとの接点や、個人レベルでのエンパワーメント経験を分析し、ソーシャルアクションに参画する契機や動機づけについて検討を深めたい。

さらに、民主主義や社会正義の実現といったソーシャルワークの理念と、世界規模で展開しているSWAN-Iや裁判アクションをはじめとする日本国内のソーシャルアクションの理論的接合を目指す。

個人研究

『四六文章図』研究—日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐって—

研究代表者・特別研究員 上原 尉暢  
(中国文学)

本研究が対象とする『四六文章図』は、江戸初期の円覚寺の僧大願の編になるもので、中世以来の数々の駢体の文章作法書を集成したとされているものである。この『四六文章図』を手がかりとして、五山文学における「駢体」の「読み書き」のあり方、すなわち「駢体」の実態とその享受を有り様を明らかにすることが本研究の主たる目的である。

本研究では、『四六文章図』の実体を解明するために、その詳細な訓読・語釈・通釈をつけた訳注を作成している。2020年度は前年度を受けて、「卷二 儒家四六并文之類」及び「卷三 文類 格體惣論 短文法并長文」の訳注作成作業を行った。同時に前年度の「序文」及び「卷一 総説部分」までの訳注のブラッシュアップも行った。

これまでの作業を通して改めて気づかされたのは、本文中に引用される文章が、日本・中国の詩論書・文章指南書の類いに止まらないということである。例えば、訓読的な記述については、元代に編纂された『古今韻會舉要』に由来するものが頻繁に見られる。『古今韻會舉要』は、詩文の押韻を確かめる際の韻書の類いであり、日本に早くから舶来され、五山ではその出版も行われているほど流通したものである。また明代万暦年間に板刻された『助語辭』という書物からの引用も数多い。『助語辭』は、清朝以後の漢語研究書のレベルには遠く及ばない、恐らくは民間で流通した辞書であり、中国本土では現存を確認するのが困難なものである。しかし日本には慶長・元和年間（1596～1624）にすでに舶載されており、寛永年間（1624～1645）にはその和刻本が出版されるほど人気を博していた。『四六文章図』は、こうした室町から江戸にかけて日本で広く流通した中国由来の韻書・古辞書といった類いも取り込みながら成立しているのである。この点の詳細については、近く関連学会、または学術雑誌に発表したいと考えている。

## 個人研究

## 19世紀後半のドイツ語文学における「地方」と「ガリツィア」の表象の比較

研究代表者・講師 麻生 陽子  
(ドイツ語文学)

18世紀末以降のポーランド分割によって、オーストリア・ハプスブルク帝国に組み込まれたのが、ガリツィアと呼ばれた地方である。現在のポーランド南東部およびウクライナ西部にあたり、当時の帝国の周縁をなしたこの地方には、多様な民族や宗教、文化、言語が混在していた。

ヨーロッパとアジアのいわば狭間に位置したこの地方は、前近代的な風習が残る異質な場所として「発見」され、近代化が進展する西欧社会で注目を集めた。帝国崩壊を経て今なお根強く残っているこの場所にかんする一連のイメージは、旅行者や役人らによる紀行文をはじめ、19世紀中葉以降、人気を博した地方文学やガリツィア出身の作家たちによるテキスト群によって形成されていった。地元の貴族らに搾取された農民やユダヤ人らの生活は「不潔」で「貧困」そのものでそれらは啓蒙的な視点から「後進性」として捉えられ、この地方全体のイメージとなっていく。

全ヨーロッパからのアメリカ移民が増加の一途をたどるなか、帝国からもっとも多く移民を出したのもガリツィアだった。19世紀末以降、高揚するナショナリズムや反ユダヤ主義、頻発するボグロムから逃れようと、貧しい農民、とりわけユダヤ人がロシア領やガリツィアからアメリカへ、あるいは帝都ウィーンをはじめ西側社会へと移民していった。

定住地を生涯持たず、ヨーロッパ各地を放浪する生活を選んだドイツ語作家に、ガリツィアのプロディ出身のヨーゼフ・ロート(1894-1939)がいる。カトリックに改宗後も自らのユダヤ性を意識しつつけたかれは、複数の民族が共存する古き良きハプスブルク世界に共感を示す一方、反ユダヤ的で野蛮な同時代を批判し、物質的繁栄を極めるアメリカにも懐疑的でありつづけた。こうしたロートの価値観が認められる作品に、貧しい東欧ユダヤ人一家のアメリカ移住を描いた小説『ヨブ』(1930)がある。本作における「アメリカ」と「ガリツィア」はそれぞれトポスの伝統を踏まえて造形され、ともに双方を映し出す鏡として機能している。

## 個人研究

## 田辺哲学の中期から後期への発展の解明—武内義範との交流を踏まえて

研究代表者・任期制助教 浦井 聡  
(宗教哲学)

田辺元(1885-1962年)は西田幾多郎(1870-1945年)の後継者であり、西田と共にいわゆる「京都学派」の礎を築いたとされる哲学者である。田辺の哲学は「種の論理」(1934-41年)や「懺悔道」(1944-53年)、「死の哲学」(1953-62年)などの名を与えられた哲学的立場によって知られている。

本研究は、田辺哲学研究の中でほとんど顧みられてこなかった《沈黙期》(1941-44年)に光を当てるものである。田辺は1934年から国家と個人の問題を論じた「種の論理」の理論的構築に着手するが、1941年に一切の著作の発表を止めて《沈黙期》に入る。この哲学的挫折のあと、田辺は1945年に京都を離れるまで、弟子の武内義範(1913-2002年)を介して親鸞や曾我量深(1875-1971年)の著作に対する理解を深めていた。このことが1944年11月の京都帝国大学での講演「懺悔道—Metanoetik—」や『懺悔道としての哲学』(1946年)における哲学的復活の跳躍板の役割を果たす。この《沈黙期》における田辺哲学の深化の解明が、本研究の目的である。

この目的の達成のために、本研究は《沈黙期》前後の著作の読解と並行して、未公開資料の翻刻と公開を行う。具体的に言えば、ひとつは田辺の手帳、もうひとつは武内義範との往復書簡である。田辺は《沈黙期》の思索の過程を手帳や武内義範宛書簡の中で記している。したがって、田辺の手帳および田辺・武内往復書簡の翻刻を行うことで《沈黙期》の田辺の思索の深化を実証的に解明できる。このことによって、今まで断片的に理解されてきた「種の論理」と『懺悔道としての哲学』以降の宗教哲学との連続性と差異を精緻に解明することができ、ひいては1934年以降死没する1962年までの田辺哲学を統合的に理解することに大きく貢献することができる。

本研究は2020年度までに、武内義範への田辺の書簡の半数と、田辺の手帳3冊(1943年1月から1944年5月までのもの)の一次翻刻と一部の一次翻刻済資料の二次翻刻・校正を行った。2021年度は残る資料の翻刻と校正を進め、当該年度内の公開を目指す。

個人研究

中世前期の飛鳥井家における顕昭の著作の受容の研究

研究代表者・任期制助教 鎌田 智恵  
(歌学・日本書紀受容史)

本研究の目的は、院政期末から鎌倉初期に活動した六条藤家の歌学者・顕昭の歌学の後代的受容の研究、とりわけ飛鳥井家における著作の受容状況を調査することである。2020年度は、以下の3つの調査研究に取り組んだ。

1. 飛鳥井雅有の活動の整理

飛鳥井雅有(1241-1301)は顕昭の著作を多く書写したことで知られる人物である。次の2の研究の前段階として、先行研究および諸文献の記述を手がかりに雅有の生涯における活動について整理し、人物像を確認した。

2. 顕昭歌学が雅有へ与えた影響の調査

雅有は藤原為家に古今伝授を受けた、歌人の系統としては御子左(二条)流の人物にあたる。しかし、東宮への『古今集』の講義に際しては定家の注釈とあわせて顕昭の注釈も見せたり(『春の深山路』)、顕昭の複数の注釈書を書写したり(諸本の奥書)と、流派にとらわれず幅広く学んだ人であった。当然、彼の和歌の知識には、顕昭歌学から学んだものも含まれていると予想される。そこで彼の和歌を中心に、顕昭(またはその周辺)の歌学から影響を受けたと考えられる点について調査・研究した。本調査・研究は2021年度も継続中である。

3. 勤修寺本古今和歌集注の本文研究

勤修寺本古今和歌集注は、顕昭の古今説の影響を受けた古今注釈の1系統として知られている。しかし現在、翻刻はなく、なされた研究もわずかである。そこで本系統の1伝本である九州大学音無文庫蔵本の複写を入手し、翻字および本文研究に取り組んだ。顕昭の古今説のうち、何が継承され何が棄却されたか、また継承された説については、更にもどのような説との衝突・折衷・統合が見られるのかを確認し、古今注釈史における顕昭説の位置づけについて検討した。本調査・研究は2021年度も継続中である。

2020年度は、調査旅行を中止したこともあり、全体として研究が遅れている。本課題は2020年度を以て終了の予定であったが、2021年度まで期間を延長することとなった。

個人研究

仏教講釈文献の利用と説話の発展に関する写本学的研究—敦煌文献を中心に—

研究代表者・任期制助教 高井 龍  
(敦煌学)

2020年度は、敦煌文献「維摩詰所説経講経文(擬)」のうち、3点(S.4571+S.8167、S.3872、P.2292)の写本研究を通して、10世紀中国の仏教講釈文献である講経文の利用の一端を明らかにした。

S.4571+S.8167は、一部を失った状態であるものの、なお22メートルを超える長巻であり、その重さと書写方法からは、実際の講経の場で使うことは目的とせず、その中の内容を他の写本に抜粋して使用する底本であることと考えられる。

S.3872では、経文とそれを敷衍した詠いの韻文は同一写本に由来するものの、散文で語られる部分はすべて異なる写本から貼り合わされたものであることを明らかにした。また、その内容が2つの品に跨がるものの、そのことが明示されていないため、この写本の作成者以外の僧侶が利用するには困難が伴う、他に類を見ない講経文であることを明らかにした。

P.2292は、四川から将来された写本であるものの、その執筆者は中国各地で仏教の布教に努めた遊行僧であることや、実際の講経の場では、特に写本後半の内容が説かれたと考えられることを指摘した。

以上の写本の理解は、物語性に富む『維摩経』の講釈文献が、10世紀敦煌でどのように作成され、用いられたのかを明らかにするとともに、写本の残存が多くない中国古典文献の利用と伝播の理解に資する成果と位置付けられる。その一方で、前年度の研究において明らかにした『維摩経』と「祇園因由記」との関係が、「維摩詰所説経講経文(擬)」には認められないという問題がある。この背景には、講経文が敦煌以外の地域から将来されたものであることを併せ考える必要があるだろう。しかし、その具体的な解明は、当時の文献の受容に潜む種々の要因をも明らかにせねばならず、今後の研究課題である。今日我々が読むことのできる中国の古典文献は、そのほとんどが版本によって伝承されたものである。多くの研究余地が残る写本研究の中で、講経における写本の実際の利用や伝播について具体的な資料に基づく考察を進め得たことは、本研究の1つの成果であったと考える。

## 個人研究

## 説話の生成に関する研究—貴族・寺院社会における記録の作成・管理との関連を中心に—

研究代表者・准教授 佐藤 愛弓  
(国文学)

説話は、古典文学において1つのジャンルを為しており、一般には『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』といった説話集に収められた姿で知られている。しかし、そのように説話集に収載される以前の、いわば説話の原点について考える時、有職故実を伝えるための貴族の言談や、僧侶の師資相承の過程の言い伝えを視野に入れねばならない。

本研究の目的は、説話を原点から捉え直すことにある。具体的には、現在でもなお記録、資料が所蔵されている文庫の調査を進め、文庫という場から説話を捉え直すこととする。貴族・寺院社会において、説話は、日記・儀式書・問書・言談など、多様な資料群の内に存在し、必要な機能を果たしていた。本研究では、文庫の資料調査から、中下級官僚（僧侶）の記録作成・管理をめぐる動きを明らかにし、それを基盤とした説話の生成のシステムを提示する。具体的には次の3つの手順で作業を進める。

(1) 勸修寺・東寺などひとつの体系性を持った資料群（文庫）の全体構造を把握し、そのなかで説話がおかれた位置（位相）を具体的に提示する。

(2) 文庫という記録の生成、管理の場を土壌として成立する編纂物について、具体的な資料を挙げてその過程を考察する。

(3) 両者で明らかになった事例を体系化・論理化することで、説話の生成・管理の過程に関する体系的なモデルを提示する。

2020年度は予定していた①勸修寺聖教（京都大学総合資料館寄託）、②東寺観智院金剛蔵聖教、③仁和寺塔中蔵聖教のうち、①②が新型コロナウイルス感染症感染予防の観点から中止となり、③についても期間が大幅に制限された。結果として、予定した調査の5分の1ほどしか進められなかった。

調査ができなかった期間は、(2)の編纂物の分析を進め、こちらについては有意義な成果を上げることができた。しかし、資料調査が進められておらず、完成年度としては、不十分な状況であったために、研究期間を1年延長することとなった。今後(1)を着実に進めることによって、最終目標である(3)を達成することができると思われる。

## 個人研究

## 健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーションの認知—非認知能力の測定

研究代表者・教授 江森 英世  
(数学教育学)

コミュニケーション効果の研究が示すように、一般的なコミュニケーションでは、経済的に、そして、効率的に送り手の意図を受け手に送ることが、よいコミュニケーションの在り方だと考えられてきた。しかし、数学の学習場面で提示される問題は、それが数学の問題である限り、問題文や添付されている図などの解釈はそれほど容易ではない。通常、私たちは、パズルに答える時のように、与えられたメッセージの解釈に困難さを感じる。それは、数学の問題が、その情報の取り扱い方の特性として、「冗長性 (redundancy) の低減」という考え方を含んでいることによる。つまり、数学の問題文の読解の困難さは、問題文中には、その問題を解くために必要な情報が最小限の表現の中に詰め込まれているが、その提示の仕方が、容易に理解できる形では示されていないという事情による。

数学学習におけるコミュニケーションは、問題解決、推論、情報伝達、ならびに、数学的知識を関連づけるという、数学学習の場で展開されている諸活動を統合する活動である。コミュニケーションは、単なる情報伝達ではなく、情報伝達に付随する認知過程を考慮することにより、個々の学習者の数学学習そのものに深く関わり合うことになる。数学の学習場面で行われるコミュニケーションを理解するためには、単なる記号や図式の解読だけではなく、問題解決や推論などの数学的思考を駆使したメッセージ解釈が必要となる。記号や図式をコードとして解読する以上の能力が、数学的コミュニケーション能力には含まれる。

本研究では、コード解読だけでは得られない隠された情報を獲得する力を、「見えないものを見る力」として考察する。問題が解ける情報が示されているにもかかわらず、なぜ、人々はその情報に気づけないのかという問題は、数学的コミュニケーションという特殊なコミュニケーションの特性を分析するためには欠かせない視点となる。これが従来の数学的問題解決学習の研究をコミュニケーションの研究として再構成する利点である。こうした研究の再構成は、「技能としてのコミュニケーション能力の育成」という目標を、「見えないものを見る力としての数学的コミュニケーション能力の育成」という新たな教育目標として位置づけ直すことを含意している。

## 個人研究

### アフロ・ユーラシア乾燥・半乾燥地域の水利権に関する比較史研究

研究代表者・准教授 井黒 忍  
(東洋史)

#### 1. 研究会の開催

2020年度においては、下記の通り研究会を二回開催し、水利権と地域社会、国家との関係について討論を行った。いずれもオンライン(zoom)での開催となった。

(1) 2020年10月17日、井黒忍「中国北部地域(華北)の水利権に関する歴史学的考察」。参加者は井黒忍、小川道大、小沼孝博、熊倉和歌子、塩谷哲史、西川優花、和崎聖日。

(2) 2021年2月13日、熊倉和歌子「近代以前のエジプトの場合」。参加者は井黒忍、小川道大、小沼孝博、熊倉和歌子、塩谷哲史、西川優花、和崎聖日。

なお、当初の計画では中国華北地域への現地調査を予定していたが、新型コロナ感染症の流行状況に鑑みて調査の断念をやむなくされた。

#### 2. 成果の公開

本研究に関わる成果公開のため、下記の学術論文および解説を執筆し、学術誌・著作に掲載した。

(1) 「村のいしぶみから見た生活用水をめぐる日常史—中国河南・山西・河北の井戸とため池の事例をもとに」、石井美保ほか編『環世界の人文学—生と創造の探求』、人文書院、pp.395-416 (447p)、2021年3月

(2) 「生み出される「公」の水—伝統中国の水をめぐる認識とその変容」、『大谷学報』第100巻第2号、pp.39-59、2021年3月

(3) 「解説：環境と災害の歴史」、漢字文献情報処理研究会編『デジタル時代の中国学レファレンスマニュアル』好文出版、pp.143-146 (476 + 86p)、2021年3月

## 個人研究

### 新たなソーシャルサポートとしての 〈よりそう支援〉のモデル化に関する研究

研究代表者・講師 大原 ゆい  
(社会学)

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、対面形式での聞き取り調査の実施や現地調査が困難となったため、当初の研究計画を一部変更して研究を進めた。具体的には、ドナルド・ショーンの提唱する専門家像である省察の実践者(Reflective Practitioner)の概念を援用したる〈よりそう支援〉に取り組む実践者の状況を明らかにするために、オンラインによる聞き取り調査を行った。とくに、〈よりそう支援〉に取り組む実践者のなかでも、①若者支援に取り組む実践者、②視覚障害者の支援活動に取り組む実践者を対象に、近年の活動動向を把握した上で、それぞれの当事者とボランティアをつなぐコーディネート機能に着目をした。

①では、経済状況の悪化が若者の生活実態はもとより、社会的な活動への参加も難しくしている状況にあることが強調された。また、従来であれば「社会に関わりたい」「社会を変える一歩としてボランティアに参加したい」という若者がボランティアを希望する傾向にあったが、近年では「社会との接点」よりも「サークル的な活動」として参加する傾向が強いということであった。②では、点訳、プライベート点訳、点訳校正、対面読書、蔵書音訳、読み書き等を通じた支援を行う。近年一般の市場に出回っている出版物も点訳や音訳されたものが出版社から当事者へ提供されることもあるが、未だ数は少なく、そういったものに対応するためのプライベート点訳のニーズが高いとのことであった。加えて、行政から発行される情報誌や、文書なども自治体によっては十分に視覚障害者のニーズに対応しているとはいいがたく、公的サービスの不十分さを実感するものであった。

聞き取り調査を通し、近年のボランティアの特徴として、ボランティアの個人化が進んでいることが明らかとなった。たとえば、従来ボランティア活動を通して参加者同士のつながりが生まれたり、社会へ発信する活動として位置づけ参加する人が多い傾向にあったが、近年では、個人のやりがいや社会参加が重視される傾向にあるということである。これは、個人化する社会での新たなボランティアスタイルへの変容であり、支援者の機能もこれに呼応する形で変化を求められていることが明らかとなった。



## 個人研究

## 戦国期の誓約をめぐる社会的思想史的研究

研究代表者・任期制助教 山本 春奈  
(日本中世史)

本研究は、起請文（誓約事項及びその違反時に神仏罰を受ける旨を記した文書）に記載された神仏のうち、梵天・帝釈、「日本国中大小神祇」といった文言、八幡・天満など日本の主要な神仏を対象に、これらの神仏がどのように選択・配列されていたのかを明らかにし、同作業を通して当時の誓約と神仏とがどのように関連していたかを読み解くことを目的とする。

2020年度は、①中国・九州地方の起請文にみられる日本の主要神の整理・分析、②日本の主要神に関する研究成果および関連史料の収集、③全国の起請文に記載された日本の主要神の整理・分析を行った。

①については、両地方において天照大神が1400年代から1500年代前半にかけて記載されるが、1500年代後半頃からほぼ見られなくなること、対して愛宕権現や摩利支尊天が1500年代後半から増加するなどの共通点を見出すことができた。ただし中国地方では地域全体で天照大神が記載されていたわけではなく、石見益田氏や安芸小早川氏関連の起請文に限定されるなど、地域内での差異も確認された。

②については、日本の主要神に対する信仰の全国の特徴や、同信仰が中国・九州地方において広まった時期などを把握した。また、ある主要神の信仰が地方へ伝播・拡大した時期と起請文に記載されていた時期にズレがあることを確認した。よって、主要神の起請文への記載は、単なる地方への信仰拡大の結果とは言えず、起請文独自の神仏選択基準が存在した可能性があることが明らかとなった。関係史料については、起請文に限らず、主要神が当時どのような存在として認識されていたのかについて明らかにするべく、室町期以降成立の軍記・兵法書・日記などにみられる主要神関連記事を収集しているほか、中国・九州地方の自治体史などでも確認を進めている。

③については、①を通して中国・九州両地域における共通点が複数浮上したことで、日本の主要神の記載状況を全国規模で考える必要が生じた。事例については研究開始前におおよそ収集済みであり、それを見ると、やはり天照大神は全国的にも1400年～1500年代前半に集中していることを確認した。また、このうち越後国の事例の整理を進め、中国・九州地方との共通点・相違点を見出した。

## 個人研究

## 中山間地域のモビリティ確保策に関する比較研究

研究代表者・元任期制助教 野村 実  
(社会学・地域交通論・地域社会学)

本研究は、中山間地域における高齢者等のモビリティ確保策を、先進地域の実践と政策展開から導出することを目的としている。2020年度は特に、京都府内の中山間地域に焦点を当てて調査研究を行う予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響も受け、当初予定していたフィールドワークを中止・延期せざるを得なかった。

一方で、2019年度までに実施してきた予備的研究を基礎としながら、調査対象先への電話や電子メールでの補足調査を積極的に実施した。具体的には、近畿北部地域に位置する京都府京丹後市や兵庫県養父市の自家用有償旅客運送であり、公共交通空白地での住民主体の取り組みは、コロナ禍でも生活に不可欠な買い物・通院等の移動需要に対応していることを確認してきた。

また、2020年度の成果としては、MaaS (Mobility as a Service) に関する文献研究と実地調査を行ってきたことも挙げられる。このMaaSは、多様な移動手段を一つのサービスとして、スマートフォンなどの情報端末を通じて提供するものであるが、日本では主に都市部や観光地で実証実験が進められている。一方、本研究では、公共交通の路線減少や高齢者の運転免許返納後の移動手段確保など、多様化・複雑化する課題を抱える地方部において、MaaSがどのような役割を果たしうるのか、国内外の取り組みに注目してきた。

北欧等の国外の事例については、コロナ禍で調査等は断念せざるを得なかったが、文献研究等を通じて、①特に農村部では公共交通と私的な資源（住民送迎等）の組み合わせが求められること、②そのスキームの一つとして、官民・市民連携 (PPPP) のアイデアがあることなどを確認してきた。

これらをふまえ、2020年度後半には国内での地方版MaaS（海外では“Rural MaaS”とされる）の具体事例として、京都府舞鶴市における地域共生型MaaSの取り組みに着目し、2020年11月に実地調査を行った。舞鶴市のMaaSは、実証実験段階ではあるが、公共交通と住民送迎の組み合わせが図られている。

以上の成果をふまえて、2021年度以降の研究では、引き続きMaaSの展開や移動手段確保に取り組む事例に着目しながら、各地域へのモビリティ確保策の導出を試みていきたい。

個人研究

維新时期における東本願寺の破邪論とキリシタン  
一樋口龍温の未公開史料の分析と公開一

研究代表者・特別研究員 狭間 芳樹  
(比較宗教学)

2020年度の活動として本研究の主課題である、維新时期の東本願寺で耶蘇防禦掛を務めた樋口龍温が収集した漢文聖書(香港英華書院印刷、1855年)が発見された京都市の圓光寺へ赴き調査をおこなった。同寺には聖書のほかにも書簡類といった未公開史料が存在し、その調査にあたり真宗大谷派教学研究所の松金直美氏(本学非常勤講師)らとプロジェクトを開始した。初回では現在、樋口宛て書簡の調査・翻刻を進める東館紹見氏(本学教授)より、かつて圓光寺から大谷大学図書館に寄贈された樋口の収集書籍や幕末維新时期における東本願寺に関する詳解を受け、本研究を推進する上での多くの示唆が得られた。このプロジェクトは次年度以降も継続し、翻刻ならびに分析を進める予定である。

一方、今年度のもうひとつの課題である浦上キリシタンの説論に従事した東本願寺の破邪僧に関する調査については、新型コロナウイルス蔓延による資料所蔵先の入館規制措置等もあり、多くは次年度に持ち越さざるをえなくなったものの、樋口のもとでキリスト教を学び、大谷光瑩の洋行に随行した松本白華が書き残した諸史料に関する研究会を実施した。当該史料については、1930年代に徳重浅吉氏が翻刻したものがあり、そうした先行研究を検証する目的から、幕末史料の翻刻に長じた内藤幹生氏(前千葉県文書館)やメナチュエ・アンドレス氏(京都大学)らとオンライン会議を中心とした研究会を毎月一度おこなうなかで従来の翻刻の不備などが明らかになりつつある。

また松本と同じく洋行に随行し、弾正台のキリスト教課者として活動した安藤劉太郎(関信三)については、安藤の長兄で因明の研究者としても知られる雲英晃耀による『護法総論』(1869年)や樋口の『關邪護法策』『急策文』(いずれも1863年刊)といった破邪書の考察を通して、長崎でキリシタンと対峙した安藤の宗教観に関する研究を進めた。以上の成果は『日本宗教史3 宗教の融合と分離・衝突』(吉川弘文館)、『キリシタン歴史探究の現在と未来』(教文館)などの書籍、『キリスト教史学』(74輯、キリスト教史学会)、『アジア・キリスト教・多元性』(19-2号、「アジア・キリスト教・多元性」研究会)といった学術雑誌、『季刊民族学』(174号、千里文化財団)において公表した。

個人研究

真宗地域における葬墓制と他界観  
に関する民俗学的研究

研究代表者・特別研究員 本林 靖久  
(文化人類学・民俗学)

2020年度の本研究は、コロナ禍の影響でフィールドワークが実施できなかったが、真宗地域(福井県・石川県・富山県・岐阜県)を対象にした自治体史(通史編・民俗編)や民俗調査報告書による葬送墓制の事例報告を網羅的に把握した。

そのなかで真宗門徒の伝統的な葬送儀礼の特徴の一つとして、遺体よりも絵像本尊が重視され、死者を礼拝せず、遺骸は遺棄すべき観念があることが認められた。二つめとして、北陸の真宗地域は圧倒的に火葬が多く、遺骨の一部を本山(東本願寺・西本願寺)に納骨する真宗門徒が広範囲に認められた。

また、真宗地域の無墓制や墓上植樹の報告のある村落の葬送墓制の事例を整理し、データベース化を実施した。本来なら2020年度に、すでに報告された無墓制や墓上植樹の地域に調査に入り、伝統的葬送習俗の持続と変容の実態を確認する予定であったが実施できなかった。この点は2021年度のフィールドワークで詳細に考察したい。

本研究では、真宗地域の葬墓制を特殊として見るのではなく、中世的から近世にかけての日本人の通底した基層文化のなかで、残存する真宗民俗の墓制(墓上植樹)として捉えたり、真宗の教義とのなかで民俗に即応する創造的な真宗民俗の墓制(無墓制)と捉えたりすることが可能であるかを検証することが目的である。

この一環の研究として、近年は、「わたしの骨は桜の木の下に」という人の声を聞くようになり、遺骨を生前好きだった海や山に撒く散骨葬や樹木葬と呼ばれる葬法に大きな関心を持たれているが、真宗地域に見られてきた墓上植樹の民俗と現代の樹木葬との関連についても考察し、論文(「日本人の『墓と樹木』の系譜ー現代の樹木葬と墓上植樹・弔い上げの民俗との関連をめぐってー」『日本語・日本文化センター』第48号、大阪大学日本語日本文化センター、2021年2月:大阪大学機関リポジトリで公開)としてまとめた。

## 個人研究

## 近世における『教行信証』の創造的解釈—智暹『樹心録』の研究—

研究代表者・東京分室 PD 研究員 青柳 英司  
(真宗学)

親鸞(1173-1262)の主著とされる『顕浄土真実教行証文類』(以下『教行信証』)の研究は近世中期以降に活発化し、多くの講義録や注釈書が作られた。その中でも初期のものに属し、後の学僧らが広く参照した著作の1つに、本願寺派・智暹(1702-1768)の『教行信証文類樹心録』(以下『樹心録』)がある。本研究では、『樹心録』から智暹の問題関心を探ると共に、本書が以後の『教行信証』解釈に与えた影響について考察するものである。

2021年度は特に、近世大谷派宗学における『樹心録』の受容について、恵琳(1715-1789)の『教行信証文類六要鈔補』(以下『六要鈔補』)について考察した。恵琳大谷派の第3代講師とされる人物であり、その著作である『六要鈔補』は、大谷派における『教行信証』注釈の端緒となるものである。本書において恵琳は、存覚(1290-1373)の『六要鈔』を厳しく批判する一方、智暹の『樹心録』を取り上げ、「渙然として、大いに祖意の蘊奥を発す」(『真宗全書』37・1頁)と絶賛している。

また、『樹心録』は『教行信証』の前五巻を「明真実六法」、「化身土巻」の前半を「明方便六法」、「化身土巻」の後半を「分別時教」とする独特の構造理解を示しているが、『六要鈔補』の科文も基本的に同じものである。これは恵琳が、『教行信証』の構造に関する智暹の理解を、ほぼそのまま受容したことを意味する。そこで本研究では、『教行信証』の構造理解を中心に、恵琳における智暹『樹心録』の影響について考察を行った。

恵琳以前の大谷派では、①『六要鈔』の随文科か、②相伝教学の往還科によって、『教行信証』の構造が説明されていた。しかし前者の理解では、「化身土巻」の位置づけが不明瞭であり、後者の理解では真化二巻が還相回向の内容となり、「知識帰命」や「一益法門」といった批判が想定された。そのため、恵琳はこれらに代わる構造理解を提示するものとして、智暹の『樹心録』に注目した可能性があることを指摘した。

なお、この成果は真宗連合学会第67回大会において発表すると共に、同学会の研究誌『真宗研究』に論文として投稿した。

## 個人研究

## 近代日本における教祖像形成に関する総合的研究—最澄・空海・親鸞・日蓮—

研究代表者・元東京分室 PD 研究員 大澤 絢子  
(宗教学・近代宗教学)

本研究の目的は、近代日本において教祖像が形成されてきた意義を解き明かし、日本仏教史の全体像を再構築することにある。初年度である2020年度は、新型コロナウイルスの流行による影響から、図書館等での資料収集や調査が計画通り進まなかったものの、研究課題に関わる論文を執筆・発表することができ、次年度の研究に向けた資料の収集と考察にも着手することができた。また、研究会での報告や、関連分野の研究者との意見交換・情報収集は、オンラインを活用するなどして研究を遂行することができた。

2020年度は、主に親鸞像に焦点を当て、明治から昭和期に親鸞を取り上げた文学作品と歴史研究の成果の収集およびリストの作成を中心に行った。具体的な成果としては、①資料収集・整理および研究成果の発表、②関連領域の研究者との共同研究会の実施、③近代仏教研究の最新の成果についての書評である。さらに、年度の後半からは、日蓮像の形成について考察するための資料収集を開始した。

①ではまず、「親鸞の妻帯」をめぐる近代の歴史研究と近代文学の記述と年代的傾向を検証し、恵信尼が親鸞の妻として確定され、その関係性が語り出されていくプロセスを明らかにした。この成果は論文(『学際日本研究』第1号、2021年)としてまとめた。また、大衆文学と親鸞像との関わりとして、吉川英治の親鸞像と日本主義思想との関係を明らかにし、その成果を石井公成監修/近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』(法蔵館、2020年)にて発表した。さらに、本研究の主題の一つである物語と日本宗教の関係についての解説をまとめ、岩田文昭・碧海寿広編『知っておきたい日本の宗教』(ミネルヴァ書房、2020年)に執筆者として加わった。②では、主に大正期の出版メディアにおける宗教言説について、関連する領域の研究者との意見交換を行ない、共同研究会「仏教文化におけるメディア研究会」にて「新聞小説と親鸞」(2020年3月27日)との題にて報告を行った。③については、日本の僧侶の妻帯にまつわる事象や問題を取り上げた最新の研究成果3冊の書籍の書評を執筆した(『近代仏教』第27号、2020年)。この作業により、僧侶の妻帯という親鸞像に特徴的な事象から、日本仏教における現代的な課題についても検討することができた。

個人研究

## ASEAN サッカーのグローバル化に関する社会学的分析

研究代表者・教授 阿部 利洋  
(社会学)

本研究は、2034年W杯共催誘致を公表したASEAN地域の動向に焦点をあて、サッカーに関するグローバルな意味・人材をASEAN地域内の諸社会がどのように受容しているのか把握するとともに、サッカーをめぐる社会的な場に示されるASEAN諸国の相互関係・相互認識を理解することを調査・分析の課題とした。

この課題に対して、当初は海外での現地調査を中心に研究を進め、併せてそのデータに関連する理論的枠組みの包括的なレビューを行うという計画を立てていた。しかし長引くコロナ禍により現地調査が実施できなくなったため、①現地協力者からの情報提供とASEAN各国のローカルメディア関連情報の収集、および②関連研究のうち理論的な側面を扱う資料の検討を軸に研究を進めることとなった。

①に関しては、「集合的アイデンティティの経時的变化——ASEAN諸国のサッカー代表選考の動向から」としてまとめた(論集内論文として2021年度内に出版予定)。スポーツの各国代表チームには、その成績やパフォーマンスに関してシンボリックな役割を与えられる傾向がある。近年のASEAN諸国では、各国にルーツを持たない帰化選手の代表選出は(FIFA規定では認められているにもかかわらず)忌避される一方で、両親(のいずれか)が同国にルーツを持つ海外出身選手のリクルートには積極的に取り組むようになりつつある。この論文では、こうした動向に示されるナショナル・アイデンティティの変容過程と、それが前景化してきた要因を分析した。

②については、スポーツと政治の関係に着目する先行研究の比較検討を通じて、ASEANにおけるサッカーの社会的・政治的性格を位置づけるための視点を整理した(論文「スポーツ外交に関する現代的な認識枠組の比較検討——ソフトパワー、パブリック・ディプロマシー、ネイション・ブランディング」を執筆、2021年度内に『真宗総合研究所研究紀要』に掲載予定)。この論文では、冷戦終了後に変化するスポーツの政治利用に関する議論において中心的な役割を与えられつつある3つの認識枠組の相互関係を明確に図式化し、ASEAN各国の相互認識を理解するための理論的な視座を得ることができた。

個人研究

## 浄土真宗寺院における布教テキストとしての由緒書の基礎的研究

研究代表者・准教授 川端 泰幸  
(日本中世史)

本研究は、従来2次的な史料としてその史料価値をあまり認められず、活用されてこなかった寺院の由緒書に着目し、その史料が果たした歴史的役割を明らかにすることを目的としている。

戦国期から近世にかけて、とくに浄土真宗においては、本山をはじめ、各地寺院でも開基伝承や「石山合戦」への参戦物語など、多くの「記憶」が盛り込まれた由緒書が作成され、折々に参詣者などに読み聞かせられた。そして、そこで語られる「記憶」は宗教共同体としての教団への帰属意識を喚起するものとなったのである。本研究では、そのテキストである実際の「由緒書」を調査収集し、翻刻と内容分析を加えた。

本来は調査なども実施して、由緒書類を複数翻刻し、比較検討を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、調査を実施することはできなかった。

そこで、これまでその存在は知られていたものの、十分な検討が加えられてこなかった慶長年間(1596~1615)後期ごろの成立とみられる『嫡庶問答』という史料を翻刻・検討することとした。『嫡庶問答』は江戸時代初期に分立した東西本願寺の正嫡論争に関わる由緒書であり、東本願寺(第十二代教如創立)を正統であると主張する書である。研究では本書の内容を翻刻し、その構造や、著者、制作背景などについての検討を加えた。著者については、『信長記(信長公記)』などの数々の軍記物を制作したことで有名な太田牛一であるが、信長家臣でもあり、「石山合戦」時には、本願寺と敵対していた側にあった牛一が、かかる著作を制作するに至った経緯を明らかにするという新たな課題が見いだされた。また、検討の結果、この書が数多く生み出された東西本願寺正嫡論争書の中で、かなり早い時期のものであることも明らかになった。正嫡論争が盛んになるのは、寛永15年(1638)に西本願寺正嫡を主張する『本願寺表裏問答』が出版されてからであるが、『嫡庶問答』は、それよりもかなり早いものである。いわば、正嫡論争の嚆矢となった書ともいえるものであることが明らかになった。

本研究を通じて、こうした由緒をもとに、東西両本願寺教団は全国の僧俗と歴史の「記憶」を共有し、近世的教団を作り上げたという可能性を見出すことができた。

## 個人研究

## 在朝鮮日本人画家加藤松林人の阿南市所蔵作品と遺稿に関する研究

研究代表者・教授 喜多 恵美子  
(韓国・朝鮮美術史)

本研究は、植民地期朝鮮で活動した日本人画家加藤松林人(1898 - 1983)の生まれ故郷である徳島県阿南市に所蔵されている加藤の遺稿と作品を分析することで、当時の朝鮮画壇における日朝間の人的交流ならびに物的交流をあとづけ、在朝鮮日本人画家をとりまく状況を立体的に俯瞰することを目的としている。

植民地期の朝鮮画壇においては、官展である朝鮮美術展覧会の存在もあって必然的に朝鮮人と日本人の間に交流が生まれたが、その交流の実態についてははっきりしていないことが多い。朝鮮美術展覧会参与として活動した加藤は、立場上朝鮮人画家とのつきあひも多かったが、遺稿を見ていくと朝鮮人画家に対する共感を抱いていたこと見てとれる。

2020年度は計四本の遺稿のうち三本までのタイプおこしを終え、資料の読み込みとともに当時の新聞や雑誌記事にあたった。その成果として論文「在朝鮮日本人画家とツーリズムー加藤松林人を中心にー」を『大谷学報』100号に発表した。

この論文では、京城における美術家たちと言論人や財界人との具体的な交流様相の一端を明らかにすると同時に、新聞社主催の文化イベントに植民地の美術家たちが召喚され、彼らの作品が「内地」の新聞で紹介されることで、「内地」と「植民地」が紙面で往還するようなシステムが構築されていったことをあぶりだした。植民地朝鮮において新聞をはじめとするメディアと、ツーリズムならびにコマースリズムを連結させる媒体として、在朝鮮日本人画家たちの作品は効果的な役割を果たしていたのである。

朝鮮人との交流様相については、遺稿のなかでも一番大部である『回想の半島画壇』の中で加藤が言及している朝鮮人画家たちを彼がどのように評価しているのかという点について整理し、朝鮮美術に対する加藤独自の視点についても分析を深め、その成果を公開する予定である。

## 個人研究

自ら学び続ける教員養成プログラムの構築  
ー コーチングとリフレクションの導入研究 ー

研究代表者・講師 谷 哲弥  
(理科教育)

はじめに

新型コロナウイルス感染拡大による渡航制限の元、教育視察によるオランダの教員養成に関する情報を十分に得ることはできなかった。しかしながら、以前の視察サポートでお世話になった、仲本かな氏(現アムステルダム De Blauwe Lijn 小学校教諭)の協力により、オンライン通話によって、ご本人の教員養成課程における経験をインタビューさせていただく機会を得た。その概要を報告する。

教員養成の内容構成(2年コース)は、1年次(音楽・歴史・地理・演劇・体育・書写・理科)、2年次(発達心理学・英語・技術・図画工作美術)である。また、2年間共通として、オランダ語・算数数学・教師教育学を学ぶ。これに加えて、教育実習(1年次は週に1日、2年次は週に2日)が課題となっている。

実習校(実践)と大学(理論)を結びつける手法がコーチング(省察)であり、オランダの教員養成には、コーチングが要となっている。実習校の学級担任は、同僚の立場で、学生の授業を見学・省察する。大学のコーチは、学生のあらゆる思考を助けるように、週に1.5時間のコーチング実施する。また、第三者のアドバイザー(実習校の教員または外部の専門職)が学生の目標・課題に応じたコーチングを実施する。学生は、実習校での教育経験や省察を丹念に書き留めて、ポートフォリオを作成する。具体的な内容としては、学期末の省察記録・授業計画書・教員資格に必要なスキルの到達度(最終的に105項目の自己証明)・自己分析・成長計画・自分の教育理念(実践例)などで、教員となる自分の姿を示すものとなる。

コーチングにおける質問内容は、コーチを受ける学生が、自分と対話して、状況の分析、計画立案、計画の見通しを持つなどの効果を期待しているものである。

最後にオランダの教員養成が目指すものとして、自己成長できる教員として自信を持たせること・向かい合う子どもを同じように自己成長させる能力を身につけること・自分を育てることは、人を育てることにつながり、子どもを育てることにつながることである。

このインタビューによって、教員を目指す学生の成長をどのように促すのか核心の一部を知ることができたと考えられる。

# 2020(令和2)年度東京分室PD研究員個人研究成果報告

## 個人研究

### 近代日本の大衆文化における 教祖像の研究

研究代表者・元東京分室PD研究員 大澤 絢子  
(宗教学・近代宗教学)

本研究では、大正期の宗教雑誌上の言説分析を通して、近代日本の大衆文化における教祖像の形成と展開について考察した。2020年度は、新型コロナウイルスの流行による影響から、図書館等での資料収集や調査が計画通り進まず、対象とする資料の入手や分析を予定通り進めることができなかった。しかしながら、図書館等の遠隔複写サービスを活用したり、オンラインによって情報収集をしたりすることで、研究課題に関わる論文を執筆・発表することができた。また、関連分野の研究者との公開研究会の開催や意見交換は、オンライン開催に切り替えることで研究を遂行した。

2020年度は、①新真婦人会における女性運動と大正期の宗教思想との関係の検討、②石丸梧平の宗教運動の実態解明、③関連領域の研究者を招いての公開研究会の開催と仏教と近代の文芸作品に関して近接領域の研究者との情報交換を行った。

①について。年度の前半は図書館の休館等により予定していた雑誌の入手ができなかったため、既に入手できていた宗教雑誌(『新真婦人』)を中心に、大正期の雑誌と女性運動に関する研究を行い、この成果を論文「妻たちの女性運動と「宗教的なもの」——初期新真婦人会を中心に」(『真宗総合研究所紀要』38号、2021年)として発表した。本研究によって雑誌を通じた女性運動と宗教との関わりを整理することができ、大衆文化における教祖像の研究にも繋がる知見を得ることができた。②では、教団外の雑誌メディア上での親鸞像に焦点を当て、作家・石丸梧平の戦前期における運動の実態を明らかにし、これを論文「人生論と宗教——石丸梧平の人生創造運動」(『世界仏教文化研究論叢』第59集、2021年)として発表した。③に関しては、近年、戦後の勤労青年と教養との関係を明らかにした福間良明氏(立命館大学)を招き、公開研究会「人生雑誌」からみる教養と宗教」を開催し、報告を行った(2020年8月29日)。年度後半からは、大衆文化のなかでの日蓮像形成との視点から、教祖像と演劇の関係に着目し、1894年上演の歌舞伎『日蓮記』(福地桜痴作)に関する論文を執筆する準備に取り掛かった。

## 個人研究

### 『教行信証』の解釈史の研究

研究代表者・東京分室PD研究員 青柳 英司  
(真宗学)

親鸞(1173-1262)の主著とされる『教行信証』には、存覚の『六要鈔』以来、膨大な量の研究が蓄積されている。しかし、それらの研究は十分に整理されているとは言えず、解釈史を描き出すという作業も部分的にしか行われていない。そこで本研究では、近世から現代に至るまでの『教行信証』の講義録や注釈書を可能な限り収集・整理し、その批判的検証を試みている。

具体的には、①書誌学的視点からの検証と、②思想的視点からの検証を重視している。まず①についてだが、大正期以前の研究の多くは、親鸞真蹟の『教行信証』である坂東本を参照していない。後世の写本や刊本の表記は坂東本と異なる例が多く、そのような表記に基づく解釈を、親鸞の思想とすることには問題がある。よって、坂東本の表記を踏まえた上で、従来の研究を、見直す必要があるのである。

次に②についてだが、近世以前の研究においては、閲覧可能な資料に限界があったため、思想的な視点からの研究は極めて困難であった。しかし、現代では古文献の調査・公開が進み、親鸞が置かれていた思想的状況の解明も、大きく進捗している。よって、これらの成果を踏まえた上で、従来の『教行信証』研究の検証が、必要となっているのである。

そして今年度は特に、親鸞の「如来回向」の思想について、調査と考察を行った。「如来回向」とは、阿弥陀仏を主体とする回向のことであり、親鸞思想の中心を成す重要な概念でもある。従来の研究では、この思想は曇鸞の『論註』に基づくものと説明されてきたが、近年の研究では、善導や隆寛の影響も示唆されている。そこで筆者は、善導の至誠心積に関する鎌倉期の議論に着目し、当時の浄土教者の理解は、大きく2つに分かれることを指摘した。すなわち、衆生の側に真実を認める理解と、そうではない理解である。親鸞は明らかに後者の立場であり、特に『教行信証』では、真実の無い衆生のために、如来が真実を与えるということが強調されていた。以上の点から筆者は、親鸞の「如来回向」の思想が、至誠心積を巡る当時の議論を踏まえて案出されたものである可能性を指摘した。

## 個人研究

「孝」思想に基づく終末期医療の法と倫理—儒教文化圏における「善終」の実践と意思決定制度の変遷—

研究代表者・東京分室 PD 研究員 鍾 宜錚  
(生命倫理学)

本研究は、日本、韓国、台湾、香港など儒教文化圏における「孝」思想の実践に注目し、「孝」の概念の受容と終末期医療方針への影響を検討することで、家族関係および「孝」を前提とした倫理原則と意思決定の進め方を考察するものである。研究方法は文献調査および実際臨床現場にいる医療関係者たちへのインタビュー調査である。2020年度は、台湾における終末期医療の一連の法制化で見られた意思決定の主体の変化と、そこで示された尊厳概念の変容を中心に研究を推進した。従来では、延命治療の差し控え・中止は家族の合意で決められることがほとんどであり、本人の事前指示書によって差し控え・中止が行われたケースは少ない。2000年に成立した「安寧緩和医療法」は、こうした家族中心主義の概念に基づいて制定されたものと見られる。一方、2016年に制定し、2019年に施行が開始した「患者自主権利法」は、患者の自己決定権を確立し、自己決定優先の原則を法的に示した法律である。こうした家族中心主義から患者の自己決定権への法的な転換は、個人主義の意識の台頭とともに、個人の尊厳に対する社会的な意識に変化が生じたとも見られる。2020年度では、こうした意思決定の主体の変化から見られた台湾社会の尊厳概念の変容について研究し、その成果をまとめた論文は共著の書籍『東アジアの尊厳概念』(加藤泰史・小倉紀蔵・小島毅編、法政大学出版局、2021年)の一章にまとめた。

また、儒教文化圏における「善終」の実践について、2020年12月にオンラインで開催された日本生命倫理学会の年次大会では、日本、韓国、台湾における「良い死」の言説と終末期医療の法制化についてシンポジウムを企画した。同シンポジウムでは、司会者を担当しながら、台湾における「善終」の文化と法制化との関係性、そして安楽死の合法化をめぐる最近の動向について報告した。台湾では、終末期医療における自己決定権への意識が台頭し、安楽死の合法化を求める声が高まっており、国会でも安楽死法案を検討する動きがあった。新型コロナウイルス感染症の流行により、安楽死に対する社会的関心が下火になったと見られる一方、感染症の流行による終末期医療に対する社会的意識の変化については引き続き研究が必要である。

## 個人研究

現代における在日コリアンのキリスト教信仰の研究—1960年代以降の韓国社会の宗教変動に注目して—

研究代表者・東京分室 PD 研究員 荻 翔一  
(宗教社会学)

朝鮮半島から渡日してきた人々とその子孫で構成される在日コリアンは、戦前から戦後にかけて日本各地に同胞のための教会を設立した。それらは「民族の教会」として、母国の言語や文化を維持・継承する拠点として機能してきた。しかし、1960年代以降、韓国社会においてキリスト教が急成長し、また1990年代に海外布教が活発化したことを背景に、在日コリアンの教会にニューカマーの韓国人が参与するようになった。

筆者はこれまでの調査で、ニューカマーの韓国人の参与によって上述した「民族の教会」としての性格が変容してきたことを明らかにした。それを踏まえ、本研究では、オールドカマーである在日コリアンが、こうした教会の変化の中でいかなる信仰生活を送っているのか、その特徴を明らかにすることを目的とした。

初年度(2020年10月～2021年3月)はコロナ禍により大半の時期でフィールドワークが困難な状況であったことから、当該時期は本研究と関連する先行研究や資料の収集・整理を主に行った。ここではその成果として一点指摘しておく。

そもそも、筆者の想定としては、ニューカマーの韓国人の到来によって生じた、教会内における新旧コリアンの混在化は、在日コリアンにとって本国の韓国人とは異なる「在日の信仰」を自覚させるものとして機能し、その結果、エスニシティとキリスト教信仰が分ちがたく結びついているのではないかと考えた。

実際、これまでにインタビューした在日コリアン二世の中には、韓国人信者の礼拝スタイルや奉仕活動に対する違和感や度重なる韓国人牧師の交代の経験などから、「在日二世のための教会」を目指し、教会運営に携わるようになったケースがみられた。しかしその一方で、同じような違和感や経験を共有しながらも、在日コリアンであるということにこだわらずに、あくまで自分個人と神との関係を最優先にし、信仰し続ける道を見出す二世もみられた。これは、ニューカマーの韓国人の参与が、必ずしも在日コリアンのエスニシティと信仰を結び付けるものとして機能するわけではないことを示している一例として位置づけられるだろう。

## 公開シンポジウム報告 (2021.4.1 ~ 2021.9.30)

### 写本研究に関するドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究プロジェクト

デジタル・アーカイブ資料室室長 DASH Shobha Rani

情報学の研究と応用は昨今急速に発展しつつある。それに伴い、デジタル・アプリケーションや電子機器の使用が、写本研究にも活気をもたらしている。写本研究の総合的な新たな研究・技術・知見及び情報の集積を目的として、2021年4月に本資料室は、ハイデルベルク大学の Department of Cultural and Religious History of South Asia (旧名: Classical Indology 古典インド学科) と「Manuscriptology and Digital Humanities (写本研究とデジタル人文学)」という共同研究プロジェクトを立ち上げ、国際的に研究発表会、ワークショップや講演会を定期開催することになった。2021年12月までにはオンライン (Zoom) による7回の研究発表会が終了している。その発表題名および発表者を以下紹介する。

- ① Southeast Asian Buddhist Manuscripts: With a Special Reference to the Palm-leaf Manuscripts at Otani University (発表者: Dash Shobha Rani, Suchada Srisetthaworakul <本資料室嘱託研究員> ; 2021年7月2日開催)
- ② The Research Environment for Ancient Documents: A Digital Toolbox for Editing Indic Texts (発表者: Dr. Stefan Baums, Stephen White <Bavarian Academy of Sciences and Humanities> ; 2021年7月9日開催)
- ③ Digital Edition of the *Nyāyabhāṣya* (発表者: Dr. Phillip A. Maas <Leipzig University> ; 2021年7月16日開催)
- ④ New Catalogus Catalogorum: An Overview (発表者: Prof. Dr. Siniruddha Dash <University of Madras> ; 2021年10月25日開催)
- ⑤ Advanced Technologies for Imaging and Preservation of Ancient Palm-leaf Manuscripts (発表者: Prof. P. R. Mukund <Rochester Institute of Technology> ; 2021年11月8日開催)
- ⑥ Digitizing Manuscripts and Archival Sources: Three Corpora from North India (発表者: Prof. Monika Boehm-Tettelbach <Heidelberg University> ; 2021年11月22日開催)
- ⑦ Manuscript Heritage of Odisha (発表者: Dr. Mamata Mishra <Prof. K.V. Sarma Research Foundation, Chennai> ;

2021年12月13日開催)

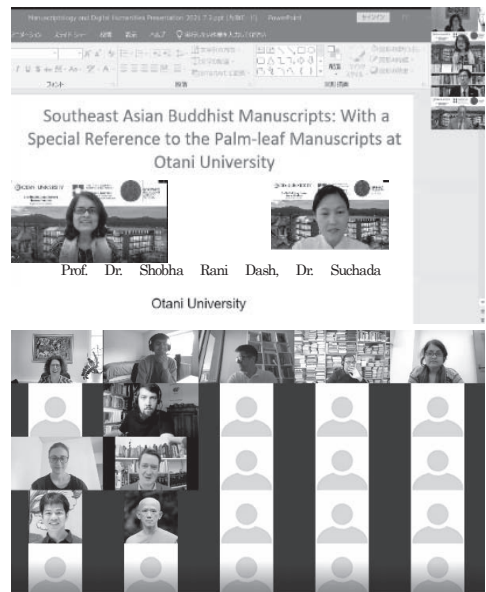
詳細は以下の url から確認できる。

<https://www.otani.ac.jp/events/2021/sfpr7000006xrihtml>

<https://www.sai.uni-heidelberg.de/krs/forschung/manuscriptology-and-digital-humanities.html>

第一回研究発表会の際は、本共同研究プロジェクトの開会式も行われた。ハイデルベルク大学古典インド学科の学科主任の Ute Hüsken 教授は本プロジェクトの趣旨説明をし、大谷大学長木越康教授、真宗総合研究所長江森英世教授、『大谷貝葉目録』作成に当たってコアー研究者の一人であった柏原信行先生等から本プロジェクトの成功に向けて挨拶が行われた。次いで、筆者と本資料室の嘱託研究員であるスチャダ・スリセッタヴォラクル博士による「東南アジアの仏教系写本一大谷大学所蔵貝葉写本を中心にして—」という題名で共同発表が行われた。

本共同プロジェクトによって築かれる国際的なネットワークを利用し、本資料室の写本のさらなる研究が可能になることが期待される。





# 公開研究会・講演会報告 (2021.4.1 ~ 2021.9.30)

## 東京分室「宗教と社会」公開研究会報告

東京分室 PD 研究員 萩 翔一

本指定研究では、日本におけるエホバの証人の歴史展開を丹念に調査研究してきた山口瑞穂氏（佛教学総合研究所特別研究員）を講師に迎え、2021年7月19日（月）に公開研究会を開催した。本研究会は新型コロナウイルス流行の状況を踏まえオンライン（zoom）にて開催した。出席者は講師を含め、計7名であった。

山口氏の報告「戦後日本における外来のキリスト教系新宗教の歴史展開—エホバの証人を事例に—」の概要は以下の通りである。

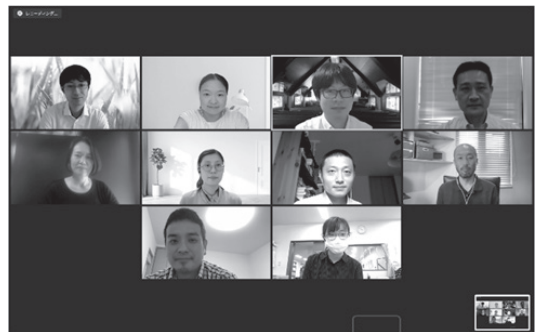
エホバの証人は1880年代初頭に米国において創設されたキリスト教系新宗教である。本報告では、日本において外来のキリスト教系新宗教のひとつとして位置づけられるエホバの証人の歴史展開から、運動のダイナミズムにおいて組織という要素が大きな位置を占める事例について検討した。外来のキリスト教系新宗教には、米国発祥のキリスト教科学、サイエントロジー、セブンスデー・アドベンティスト教団、末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）、韓国発祥の純福音教会、世界基督教統一神霊協会（現在の世界平和統一家庭連合（統一教会））などがあげられる。

エホバの証人は日本宣教の開始から90年以上が経過しているが、その展開においては、ホスト国である日本社会への適応以上に教団本部（エホバの証人というところの「世界本部」）に対する日本支部の恭順的な関係性が課題となった。この点においてエホバの証人は、外来のキリスト教系新宗教の研究に対して、海外の本部との関係性の差異という新たな比較の視点を提示する宗教運動ととらえられる。

本報告では、海外発祥のキリスト教系新宗教を比較する新たな視点として、まず、マーク・R・マリンスの「土着志向」と「外国志向」の議論を手掛かりに〈本部志向〉という分析視座を提案した。本報告における〈本部志向〉とは、世界本部と日本支部の恭順的な関係性を捉えようとするものである。次に、エホバの証人においてそうした本部／支部の関係性がなぜ重要な位置を占めているのかを教団史・組織論理から明らかにし、救済観における社会志向性の薄さについても言及した。

その上で、①前史となる灯台社の活動に終焉をもたらした要因、②戦後から1970年代半ばに日本人指導者が任命されるまでの経過、③1970年代半ばから1990年代半ばまでの伸張期の活動や社会との摩擦に対する方策、④1990年代半ば以降の離脱者の増加という現象と世界本部の方針を順に確認した。検討全体を通じ、布教を受ける側である日本社会の人びとの事情以上に、布教する側である信者の事情が大きく影響する宗教運動であり、そこにおいて世界本部という組織面での要素がプラスの意味でもマイナスの意味でも大きく影響していたことを明らかにした。

報告の後、参加者との間で質疑討論が行われた。その中では、「統治体」と呼ばれるエホバの証人独自の組織形態やメンバー選出の方法、エホバの証人の日本における信者数の状況やアメリカ、ヨーロッパにおける位置づけ、他国と比べて特に日本支部が世界本部に対して従順である理由、信者の経済的困窮が生み出す問題、教団外社会の価値観との矛盾や対立を克服する手段としての教団側の戦略的な法的対抗措置など、その組織および運営に関する質問がなされた。さらに、『ものみの塔』誌といった教団側の資料のみに依拠せざるを得ない場合、どのように教団と距離を取りつつ研究を進めるのかといった研究方法自体に関わる質問も寄せられ、それぞれに対して報告者から丁寧な回答が得られた。



# 真宗総合研究所彙報 2021.4.1 ~ 2021.9.30

## ■研究所関係

### ◎研究所委員会

◇ 2021年5月14日（金）16:30～17:50  
 （博綜館5階第5会議室）

1. 特別研究員の委嘱について
2. 2021年度研究組織について
3. その他

◇ 2021年6月18日（金）16:30～17:50  
 （博綜館5階第5会議室）

1. 客員研究員の受入れについて
2. 研究所紀要ガイドラインの改正について
3. その他

◇ 2021年8月6日（金）10:00～11:00  
 （響流館4階会議室）

1. 研究所紀要投稿ガイドラインの改正について

◇ 2021年9月24日（金）16:30～17:50  
 （博綜館5階第5会議室）

1. 一般研究（予備研究）について
2. 規定改正について

## ■特定研究

### 【研究会】

日時 4月5日（月）17:00～19:00  
 出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 箕浦暁雄  
 戸次顕彰 本明義樹 松下俊英  
 難波教行  
 場所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
 内容 「仏教入門」講義原稿作成と内容に関する議論

日時 4月19日（月）17:00～19:30  
 出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 箕浦暁雄  
 戸次顕彰 本明義樹 松下俊英  
 難波教行  
 場所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
 内容 「仏教入門」講義原稿作成と内容に関する議論

日時 5月17日（月）17:30～19:30  
 出席者 木越康 一楽真 箕浦暁雄 戸次顕彰  
 本明義樹 松下俊英 難波教行  
 場所 真宗総合研究所ミーティングルーム（2名、

オンラインでの参加）

内容 「仏教入門」講義原稿作成と内容に関する議論

日時 5月31日（月）17:00～19:00  
 出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 箕浦暁雄  
 戸次顕彰 本明義樹 松下俊英  
 難波教行（1名、オンラインでの参加）

場所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
 内容 「仏教入門」講義原稿作成と内容に関する議論

日時 6月14日（月）17:00～19:00  
 出席者 酒井恵光 一楽真 箕浦暁雄 戸次顕彰  
 松下俊英 難波教行

場所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
 内容 「仏教入門」講義内容に関する議論と撮影の事前打ち合わせ

日時 6月18日（金）17:30～19:30  
 出席者 箕浦暁雄 戸次顕彰 松下俊英  
 場所 慶閑館5階（戸次の個人研究室）  
 内容 「仏教入門」講義原稿作成ならびに意見交換

日時 7月9日（金）16:00～18:00  
 出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 戸次顕彰  
 本明義樹 松下俊英 難波教行  
 場所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
 内容 「仏教入門」試験撮影動画の視聴、ならびに今後の撮影・動画編集の方針に関する打ち合わせ

日時 7月20日（火）16:40～19:30  
 出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 箕浦暁雄  
 戸次顕彰 本明義樹  
 場所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
 内容 「仏教入門」試験撮影動画の編集作業と今後の撮影・動画編集に関する意見交換

日時 7月30日（金）10:30～12:00  
 出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 戸次顕彰  
 本明義樹  
 場所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
 内容 「仏教入門」撮影・収録ならびに編集作業

に関する打ち合わせ

【試験撮影ならびにその準備作業】

日時 6月29日(火) 16:00～18:00  
出席者 木越康 箕浦暁雄 戸次顕彰  
場所 響流館4階録音スタジオ  
内容 「仏教入門」の試験撮影(講義担当:木越康)

日時 8月31日(火) 15:00～17:00  
出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 戸次顕彰  
本明義樹 松下俊英 難波教行  
本明由美子  
場所 響流館4階プレゼンテーションルームなら  
びに慶聞館K407教室  
内容 「仏教入門」の試験撮影(講義担当:戸次  
顕彰(木越康の代理))

日時 9月17日(金) 15:00～17:00  
出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 戸次顕彰  
本明義樹 松下俊英 難波教行  
本明由美子  
場所 響流館4階プレゼンテーションルーム  
内容 「仏教入門」の試験撮影(講義担当:木越康)

■国際仏教研究

◇ Adding Flesh to Bones の校正打ち合わせ

日時: 1) 5月19日(水) 13:00～16:00  
2) 5月26日(水) 13:00～14:30  
3) 6月3日(木) 13:00～16:00  
4) 6月10日(木) 13:00～15:00  
5) 6月16日(水) 9:00～12:00  
6) 6月29日(火) 9:00～11:00  
7) 7月3日(土) 9:30～12:00  
8) 7月20日(火) 9:00～11:00  
9) 9月1日(水) 11:00～13:00  
10) 9月15日(水) 11:00～13:00

場所: ミーティングルーム  
参加者: ウェイン・横山嘱託研究員、コンウェイ研  
究員。6月16日～9月15日はZoomを利用  
してマーク・ブラム嘱託研究員も参加。

◇ EBS 設立100周年記念パネル関係

1) 準備ミーティング

日時: 8月20日(金) 10:30～12:00  
場所: 慶聞館4階南側フリースペース  
参加者: 井上研究員、藤元雅文(大谷大学准教授、

パネル登壇者) 印仏大会技術スタッフ、  
以下のパネル登壇者3名はZoomで参加。  
平岡聡(京都文教大学学長)  
守中高明(早稲田大学教授)  
氣多雅子(京都大学名誉教授)

2) 第72回日本印度学仏教学会学術大会パネルA

日時: 9月5日(日) 13:40～16:10  
場所: 慶聞館4階南側フリースペース  
参加者: 井上研究員(司会)  
平岡聡(京都文教大学学長、発表1)  
守中高明(早稲田大学教授、  
発表2、Zoom)  
藤元雅文(大谷大学准教授、発表3)  
氣多雅子(京都大学名誉教授、発表4)

■西藏文献研究

【研究打ち合わせ】

日時: 2021年6月18日(金) 13時～14時30分  
場所: 真宗総合研究所内プロジェクト研究室ルー  
ム  
出席者: 松川節、上野牧生、三輪悟士、三宅伸一郎、  
伴真一朗(オンラインでの参加)  
内容: 本年度の研究計画を確認した。

【研究打ち合わせ】

日時: 2021年9月27日(月) 14時～17時30分  
場所: 真宗総合研究所内  
出席者: 松川節、伴真一朗、三宅伸一郎  
内容: イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・  
宝の数珠』の訳注原稿に対する検討をおこ  
なった。

■清沢満之研究

【ミーティング】

◇第1回

日時: 2021年4月15日(木) 13:00～14:30  
出席者: 西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場所: 真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目的: 文献リスト作成の検討

◇第2回

日時: 2021年4月22日(木) 13:00～14:30  
出席者: 西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場所: 真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目的: 文献リスト作成の検討

◇第3回

日 時：2021年5月13日（木）13：00～14：30  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場 所：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目 的：文献リスト作成の検討

◇第4回

日 時：2021年5月27日（木）14：40～16:10  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場 所：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目 的：文献リスト作成作業報告と問題点の検討

◇第5回

日 時：2021年6月10日（木）14：40～16:10  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場 所：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目 的：文献リスト作成作業報告と問題点の検討

◇第6回

日 時：2021年6月24日（木）14：40～16:10  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場 所：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目 的：文献リスト作成作業報告と問題点の検討

◇第5回

日 時：2021年7月1日（木）14：40～16:10  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場 所：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目 的：文献リスト作成作業報告と問題点の検討

◇第6回

日 時：2021年7月8日（木）14：40～16:10  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場 所：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目 的：全体会議への資料調整

◇第7回

日 時：2021年7月29日（木）11：00～12:10  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場 所：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目 的：文献リスト作成作業報告と問題点の検討

◇第8回

日 時：2021年7月9日（木）11：00～12:10  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場 所：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目 的：文献リスト作成作業報告と問題点の検討

◇第9回

日 時：2021年9月27日（月）14：00～13:30  
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興  
場 所：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース  
目 的：文献リスト作成作業報告と問題点の検討

【全体会議】

◇第1回

日 時：2021年4月27日（火）18：00～19：30  
出席者 西本祐攝、一楽真、福島栄寿、西尾浩二、  
山雄優生、藤井了興  
場 所：ミーティングルーム  
目 的：清沢班作業全体の進捗状況報告  
研究計画の共有

◇第2回

日 時：2021年5月18日（火）18：00～19：30  
出席者 西本祐攝、一楽真、福島栄寿、西尾浩二、  
山雄優生、藤井了興  
場 所：ミーティングルーム  
目 的：清沢班作業全体の進捗状況報告、作業手法  
の確認

◇第3回

日 時：2021年6月15日（火）18：00～19：30  
出席者 西本祐攝、一楽真、福島栄寿、西尾浩二、  
山雄優生、藤井了興  
場 所：ミーティングルーム  
目 的：清沢班作業全体の進捗状況報告

◇第4回

日 時：2021年7月14日（水）18：00～19：30  
出席者 西本祐攝、一楽真、福島栄寿、西尾浩二、  
山雄優生、藤井了興  
場 所：ミーティングルーム  
目 的：清沢班作業全体の進捗状況報告

◇第5回

日 時：2021年9月29日（水）18：00～19：30  
出席者 西本祐攝、一楽真、山雄優生、藤井了興  
場 所：ミーティングルーム  
目 的：清沢班作業全体の進捗状況報告

■デジタル・アーカイブ資料室

【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究プロジェクト  
公開研究発表会】

◇第1回

日 時：2021年7月2日（金）  
発 表 者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
          スチャータ・スリセッタヴォラクル  
          （嘱託研究員）  
会 場：オンライン (Zoom)  
発表題名：Southeast Asian Buddhist Manuscripts:  
          With a Special Reference to the Palm-  
          leaf Manuscripts at Otani University

◇第2回

日 時：2021年7月9日（金）  
発 表 者：Dr. Stefan BAUMS,  
          Stephen WHITE MSc.  
          (Bavarian Academy of Sciences and  
          Humanities)  
会 場：オンライン (Zoom)  
発表題名：The Research Environment for  
          Ancient Documents: A Digital Toolbox  
          for Editing Indic Texts

◇第3回

日 時：2021年7月16日（金）  
発 表 者：Dr. Phillip A. Maas (Leipzig University)  
会 場：オンライン (Zoom)  
発表題名：Digital Edition of the *Nyāyabhāṣya*

【ミーティング・資料確認・情報交換】

◇第1回

日 時：2021年4月2日（金）15：30～17：00  
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
          アーナンダ・ミシュラ博士  
          （ハイデルベルク大学）  
場 所：オンライン (Zoom)  
内 容：2021年度の共同プロジェクトの計画につ  
          いて

◇第2回

日 時：2021年4月9日（金）18：30～19：30  
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
          アーナンダ・ミシュラ博士  
          （ハイデルベルク大学）  
場 所：オンライン (Zoom)

内 容：2021年度の共同プロジェクトの計画につ  
          いて

◇第3回

日 時：2021年5月4日（火）16：00～20：00  
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
          アーナンダ・ミシュラ博士  
          （ハイデルベルク大学）  
場 所：オンライン (Zoom)  
内 容：2021年度の共同プロジェクトの研究発表  
          者・内容について

◇第4回

日 時：2021年5月4日（火）20：00～21：00  
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
          スチャータ・スリセッタヴォラクル  
          （嘱託研究員）  
場 所：オンライン (Line)  
内 容：2021年度の研究計画について

◇第5回

日 時：2021年6月12日（土）15：00～16：00  
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
          スチャータ・スリセッタヴォラクル  
          （嘱託研究員）  
場 所：オンライン (Line)  
内 容：Manuscriptology and Digital Humanities  
          の発表内容の打ち合わせ

◇第6回

日 時：2021年6月14日（火）16：30～18：00  
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
          アーナンダ・ミシュラ博士  
          （ハイデルベルク大学）  
場 所：オンライン (Zoom)  
内 容：2021年度の共同プロジェクトの研究発表  
          者・内容について

◇第7回

日 時：2021年6月17日（木）17：30～19：00  
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
          アーナンダ・ミシュラ博士  
          （ハイデルベルク大学）  
場 所：オンライン (Zoom)  
内 容：2021年度の共同プロジェクトのHP、ポス  
          ターなど告知について

◇第8回

日 時：2021年6月19日（土）15：00～17：00

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
スチャータ・スリセッタヴォラクル  
（嘱託研究員）

場 所：オンライン(Teams)

内 容：Manuscriptology and Digital Humanities  
の発表内容の詳細確認、ディスカッション

◇第9回

日 時：2021年6月21日（月）17：30～19：00

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、アーナンダ・ミシュ  
ラ博士（ハイデルベルク大学）

場 所：オンライン(Zoom)

内 容：共同研究プロジェクト開会式の打ち合わせ

◇第10回

日 時：2021年6月26日（土）15：00～18：00

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、スチャータ・  
スリセッタヴォラクル（嘱託研究員）

場 所：オンライン(Teams)

内 容：Manuscriptology and Digital Humanities  
の発表内容の詳細確認、ディスカッション

◇第11回

日 時：2021年6月29日（火）18：30～20：00

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
アーナンダ・ミシュラ博士（ハイデルベル  
ク大学）

場 所：オンライン(Zoom)

内 容：共同研究プロジェクト第1回研究発表に関  
する打ち合わせ

◇第12回

日 時：2021年6月30日（水）18：00～20：00

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
真宗総合研究所事務局およびハイデルベ  
ルク大学のウテー・ヒュスケン教授、アー  
ナンダ・ミシュラ博士、クシュ・デーパラ

場 所：オンライン(Zoom)

内 容：共同研究プロジェクト第1回研究発表に関  
する Zoom テストおよび打ち合わせ

◇第13回

日 時：2021年9月15日（水）15：00～17：00

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ、  
津田真輝（研究補助者）、柏原信行

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：貝葉写本関係資料確認・情報交換

■東京分室

東京分室指定研究

【公開研究会】

◇タイトル「戦後日本における外来のキリスト教系新  
宗教の歴史展開——エホバの証人を事例に——」

日 時：2021年7月19日（月）

場 所：オンライン (zoom)

講演者：山口瑞穂

出席者：青柳英司、井黒忍、荻翔一、鍾宜錚、  
陳宣華ほか

個人研究青柳班

◇2021年6月3日（木）～2021年6月4日（金）

出張先：大谷大学（京都府京都市北区小山上総町）

要 務：真宗連合学会参加のため

出張者：青柳英司

◇2021年7月9日（金）～2021年7月10日（土）

出張先：真宗大谷派事務所（京都府京都市下京区烏  
丸通七条上ル）

要 務：真宗教学学会参加のため

出張者：青柳英司

■人事

■特別研究員

□新規採用（2021年8月30日付）

\*許 燕華

現 職：任期制助教

研究期間：2021年8月30日～2023年3月31日

研究課題：国際移民のホームランド維持に関する研  
究：中国朝鮮族移民による母村への遠隔  
地参加

### おわび

2020年9月1日に発行いたしました『研究所報』No.76『2020（令和2）年度「一般研究」（新規採択課題）研究目的紹介』に本来であれば載せるべき、下記原稿の掲載漏れがございました。

「説話の生成に関する研究—貴族・寺院社会における記録の作成・管理との関連を中心に—」（研究代表者・佐藤愛弓准教授）

本件は、事務局の確認不足により執筆依頼が行えていなかったことによるものです。今後は、このようなことが起こらないよう、チェック体制を強化し再発の防止に努めてまいります。

関係各位ならびに佐藤研究員にご迷惑をおかけしましたこと、深くお詫び申し上げます。

### 研 究 所 報 第79号

2022年3月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

